

川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
昭和四十九年二月二十五日印刷
昭和四十九年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷五六一号



川柳
多留
二十五篇研究

新連載・誹風柳多留二十五篇研究

No. 562

特集・女流作家 フェスティバル

三月号

ダブル祝賀句会

昭和49年7月7日午後1時



川柳塔社創立10周年記念
川柳大会
川柳塔社同人句集「川柳塔」
刊行記念

(詳細次号)

主催 川柳塔社



黒・赤・青
1本50円

新芯気鋭

●いつまでも細く書ける硬質サインペン



ライオン

ジェットペン

福井商事株式会社



たのしさひろがる お買物



阪急

大阪梅田本店
千里駅前
神戸三宮支店
東京本町店
京都府橋本支店
京都府京橋支店

ロイヤルサービス協賛

満員車他生の縁とあきらめる

値踏みしたままの財布が苦笑い

てっぺんが見える鏡で気にいらず

金婚も近く武装がまだ解けず

精進料理般若湯も別にほめ

邑久町光明院にて

中島生々庵

うぬぼれ

たとえば 心齋橋を30分間でも歩いてみた
とする。往き交う人達の大部分が、如何にも
自信たっぷり、日日は好日といった顔ばかり
である。私のように、すべての点で劣等感に
おおわれて居る者には、一寸羨ましい感じが
せぬでもない。

ギリシア神話に出て来る美青年が、水に映
った自分の美しい姿に見とれ、その影を恋
し、終に溺れ死んだ話は有名である。自己愛
というものが性愛の発達課程の中で幼児期の

初期に現われるとフロイドは教えているし、
成人になってもこの性格が続いてゆくと、所
謂病的ナルチズムになると医学書にも書
いてある。又一方人間生活のどんな方面でも
特に句作に精進して居る私達にとつても、或
程度のうぬぼれが不可欠の要件である事は勿
論であると思う。ただ心すべきは、自分を見
失った美青年ナルキッソスのような自己陶醉
だけは絶対にさけないものだ。本人も気の毒
だし、はたの人も迷惑千万だからである。

川柳塔 3月号

座右の句

風の糸のばして風にさからわず

(著人)

私の句

人情に負けて返らぬ金を貸し

両川 洋々

川柳塔三月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

うぬぼれ

中島生々庵 (1)

人間陶冶

戸田古方 (2)

俳風柳多留廿五篇研究

(一)

(22)

清 博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原 亮
鈴木 黄・室山三柳・入江 勇・岡田 甫

川は流れる

東野大八 (26)

川柳塔 (同人作品)

若本多久志選 (4)

水煙抄

北川春巢選 (30)

一分間の柳論

田垣方大 (51)

木村涼人 (61)

柳楽鶴丸 (62)

秀句鑑賞

(同人吟)

浜田久米雄 (40)

正本水客 (41)

若本多久志 (20)

北川春巢 (36)

人間陶冶

戸田古方

路郎先生の私達に残された最大の遺訓は「川柳は人間陶冶の詩」ということば。

今日の最大の関心事は経済の問題、曰く「石油危機」曰く「物価の狂騰」。

経済とは経世済民、むしろ政治寄りの言葉です。だが、大学で学んだ経済学というものも対称になるのは物が主で、物の仕組は詳しく説かれてもそれを動かす心に至っては印象に残るものは極めて少いのです。経済倫理という講座もあるにはありましたが、全く本質と遊離したものでした。

私と経済という言葉の出会いには九歳少し前でした。まだ生きていた祖父は商売人で、カキと呼ばれる北浜の出来値書きが机上にいつも置いていました。その頃からよくケイザイがどうのこうのといっているのを聞きました。

子供にケイザイが分る筈はありませんが、祖父は不経済だからといって、裏の白い紙を

川柳中山道六十九次…(13)

富士野鞍馬…

(38)

近作

諸家

(21)

長生きを

高鷲亜鈍

(21)

49年度二賞候補作品中間発表

高鷲亜鈍

(21)

女流作家フェスティバル

(42)

操子・歌子・裕子・珠子・智子・美子・芳子・つき子・柳信・メ女・阿茶・千梢・柳

夢・克枝・良子・花梢・孝華・茂美・あいき・智子・千万子・秀子・花子・小石・柳

子・トク子・瑞枝・真砂・みどり・頂留子・千代香・維久子・千寿子・米子・陽子

怒れノ川柳

きのう・きょう

雅号ぶっちゃけばなし

初歩教室

大萬川柳「新調」

柳界展望

本社二月句会

各地柳壇(佳句地10選)

一路集「放送」

「警察」

編集後記

座右の句

飲んでほしやめてもほしい酒をつぎ (霞乃)

私の句

春雷を遠くに聞いて寝るとする

大塚 勇



切ってメモにしてみました。まだ残っている効用を使いつくす。これは物の世界だけを相手にしているものではありませんでした。

商人の只一人の後継ぎに生れたので、否応なしに経済学部へ入れられました。親に見れば、金儲けの技術でも習ってほしかったのでしょう。ところが、期待に反して私はこのような不経済学士。懸けられた願いは理財のみ。古い慶応には理財科というものがあって、ことによったら、何しろ実利家の福沢さんのことですから、金儲けの技術らしいものを教えていたのかもしれない。私は満足な経済学士にはなれなかったが、不経済学士にはなれたと思っています。漱石は「不人情は人情知らず」非人情は人情を超えて、人情にあふれる、その非人情の亜流です。

経世済民のために私心なく、物を上手に使うことが、不経済だと思っています。最大多数の最大幸福の実現のためには公平・平等が大原則とならねばならず、それを大前提として、経済を超えた経済の樹立をすることです。そんな経済は余程人間の出来た人間の手で行われなければなりません。

人間の出来た人間とは人間が陶冶されていなければならぬことです。戦後の食糧危機に出馬されようとした路郎先生のお考えがわかるような気がするのです。



若 本 多 久 志 選

青森市 工 藤 甲 吉
一月九日妻みさ逝く。(行事五十三歳)

温めても温もらぬ手のむなしさよ
子の、孫の抜け殻となり横たわる
骨になった妻の温味を胸に抱く
妻すでになししんと雪は降る
川柳はいいものですと言った亡妻

倉敷市 本 田 恵 二 朗

真実を語るその目が澄んでいる
不器用がコツコツ彫ってる未来像
耐えること名もなき石に教えられ
民芸の素朴しずかに呼吸する
反省をする気になった猪古を伏せ

松江市 小 林 孤 呂 二

上限はとことん粘る額でなし
手を振れば心つうずる子の絆
真四角なばかり役人哀れなり

無いんです高いんですと妻の愚痴
「今日は」素直にいえた日の温さ

神戸市 小 浜 牧 人

勤続の椅子へ埋めた人生か
虚をついて冬の塔から鐘が鳴る
道標に慾の近道書いてなし
嫁ぐ娘の心へ持たす銀の鈴
失うものが無い人生で恐わがらず

神戸市 仲 どんたく

娑婆の息みんな吐き出し御来光
人間の孤独を笑う雁の列
その糸をたぐる刑事へ寒の月
妥結してやっぱり足りぬ年の暮
出がらしのクリスマスで飲むバーの暮

倉敷市 小 野 克 枝

洗剤パニックによせて
洗剤の卸屋と云う恨み買う

メーカーは出荷している荷がこない
洗剤の注文ばかり電話鳴る
使い量の洗剤までも出し尽し
洗剤が忍者の真似をする日本

香川県 三井 醉夢

お雑煮が冷えて急意識なし
物価高何とかしてと初詣で
大みそかこすった車許しとき
千手観音その手を一つ貸し給え
煩惱が増す中年に除夜の鐘

大阪市 小出 智子

小鳥屋の小鳥のような女客
讃美歌をふと口にする倅せか
思いがけない賀状うれしい初春にする
寒月にわが身ばかりが貧しけり
ひよっとことおかめの面を持つ夫婦

西宮市 島居 百酒

一茎一華他郷の土にしがみつ
地固めへ敷いたレールに子は乗らず
黒板の出先をベルが追う晦日
初夢の縁起はおぼろに屠蘇の酔
飲み飽いで茶漬が欲しい初春三日

大阪市 本多 柳志

甲寅の春

元日の妻まつ白な割烹着

子らの目に舐は山より高く見え
老眼鏡磨で古稀をたしかめる
舞台暗転ケチが美德になっていた
セールの夫へ朝を逆らわず

守口市 羽原 静歩

恩師の米寿を祝う(二句)
風雪の眉へ米寿の菊薫る

松山懐古(一句)

門衛のラッパせつなく春の宵
さりげなく寸志を包むお人柄
七曲り辿る女の泣き笑い
平凡に徹し切れずに残る悔

倉敷市 能登原 白水

僕なりの独立背景など要らず
百難を越えて人間丸うなり
有能の人を育てて山黙す
ネクタイを締めると父の貌となる
花柄の鍋新妻の唄で煮え

大阪市 太田 良子

久々に家族そろえど無口なり
雑踏で患者につかまる不運な日
咲きそうで咲かぬ活字の恋でもめ
休診に二日酔とは書いてなし
老眼鏡かけて切符のボタン押し

東大阪市 久米 奈良子

粉雪の一片唇に受けとめる

朝の踏み切り待たず吉とする

大こけし抱けば恋のよみがえり

真実は語るすべなき雪中花

黒髪を誇れるうちに嫁く気なり

大阪市 大坂形水

未亡人案外明るい一周忌

友達の妻君近頃わかわかしい

数の中にあるものの中身ない香典

近所まで来て迷ってらしい電話

トルコ風呂呂知らぬ野暮さを笑われる

豊中市 橘高薫風

思ひ川 虹は熱きか冷たきか

草花に水をやる 世は渴したり

歯を削る音へ ラジオはハイジャック

腕組みのまま寝入りたる弱い父

臍の緒がまた生えてくる子の受験

富田林市 板尾岳人

背広着た男へ見向きせぬ金剛

アイゼンの爪で金剛痛かろう

登らねば闘志が抜けてゆくわたし

金剛のことなら僕に聞いて呉れ

不機嫌な峰に金剛雲を張り

堺市 河内天笑

恐山どの石くれも貌をもち

靈魂が固形になった石礫

天と地の繋ぎ目で聞く巫女の声

地獄とは三原色の亀裂かも

靈魂の化石を見たり恐山

大阪市 不二田 一三夫

ひっくり返えるまいと亀 ゆっくり歩く

も一つの顔を隠した会員制

わが家のモナ・リザ只今神経痛

寄席

楽屋ではボケにどなられ教えられ

親の恩まんざい顔に生んでくれ

岸和田市 高橋操子

初市へ今年の顔が引きしまり

好きな柄売れて淋しい気にもなり

連休をさがす今年のカレンダー

旅帰る母へ茶がゆと塩こんぶ

大阪市 吉田 圭井堂

写経する手も震え出す物価高

栄枯盛衰炭坑節がまた聞こえ

心得えて居ても明治の頑なさ

小されいに住めば二号とささやかれ

大阪市 山川 阿茶

元旦に洗濯をして一人ぼち

梅一輪芦屋の釜のお湯加減

下北半島「恐山」

脳細胞減ったか帽子のすちぢめ
長髪の高ゲがプリンスライン着る

大阪市

西 出 一 栄

買いだめをせぬが自慢でいた不覚
インフレへ人間冬眠しとうなり
家計簿 赤鉛筆を又削り
心のアルバム一頁に初恋のひと

藤井寺市

西 い わ を

白菜の漬物が出て冬の味
鶯を啼かせ理髪店も値上げ
経済を心得え法衣身に装い

古稀の日

囲まれて古稀は畳と床柱

出雲市

尼 緑 之 助

平穩に明けてお雑煮は二つ
初詣何年ぶりかの大社
下駄履きの孫混雑へ手を曳いて
スタイルは万態 圧倒されそうな街

大阪市

正 本 水 客

地図のなから吹雪の色が見えてくる
波の花 能登は真冬の顔になる

雪の匂いを風は花に載せてくる
福祉元年どじょうの白い腹に似る

岡山県

浜 田 久 米 雄

句碑の建つ話先輩顔で聞き

働いて来た指先がまだ動き
身の程を知る晩酌へ線を引き
耳垢がもすこしという顔になり

高槻市

若 柳 潮 花

元旦に近くひともあり忌の字書く
注連縄をくぐる名取りの髪の艶
椿一輪雪の茶席を春にする
自腹切るほどの女にもう逢わず

宝塚市

傍 島 静 馬

お年玉孫から貰う年令になり
モノ不足かこつ女の太り肉
少しならよかと医者もいける口
川柳の祝辞がムード和げる

鳥取市

河 村 日 満

五黄の寅がも一人増えるうちの春
初夢も見ず還暦を迎えけり
インフレをあわれむ冬の風が鳴る
こころよく妻を酔わせた酒の粕

岡山県

直 原 七 面 山

雪国の女の肌の白かりき
焚きつけどあふれど女燃えて来ず
香焚いて恋の秘策を練る女
邪恋の幕閉じる二人へ遠花火

倉敷市

小 幡 里 風

真実で迫れば冗談かと逃げる

それからを妻が無口になった意地
レモン一つ置いて女が思策する
カラフルに塗る少年の未来像

門真市 福島鉄児

別れねばならぬ男へ血が騒ぎ
結ばれぬ愛 国藉のことで揉め
味噌汁をのんで働く朝になる
孫の来ぬ日はこちらから出かけ

(前月分) 鳥取市 河村日満

人を騙す文字が私の辞書にない
風紋を見る妻の瞳の澄みきって
凡人だから凡人の意地をもち
異人さんと間違うていた赤い髪

高槻市 福田丁路

感情が赴くままの恋の果て
猫撫で声という武器を出し

山陰浜坂にて

かにの足つについて本場の味を褒め
物資不足
使い捨て時代よさらばいざさらば

豊中市 戸田古方

水ついに落ちつくところへおちついて
福袋子供のほしいものが出ず
失言のもととなってたエゴイズム
老夫婦二人の前の福寿草

倉敷市 水粉千翁

明日こそ未来をひとつずつ重ね
はつ春の背のびを下駄の高さから
すがられて何れはする手を洗い
そのときをわたしは箸の重さ知る

桜井市 岩本雀踊子

気をつかう妻が荷になる冬の旅
感謝状やりたい妻へ物価高
世間様あるから母が愚痴を云い
泣き黒子女は過去にふれさせず

名古屋 吉田水車

いろいろに苦心して来る年賀状
ともかくも生きよ生きよと初日出
美容院出てしばらくは首を据え
凡夫ただもつたいたいを繰りかえし

島根県 藤井明朗

六十の春を子からのお年玉
暮しを一転 物の不足に動ぜない
人間味豊かなひとにまだなれず
政治色濃ゆし春闘を静観し

青森県 木村涼人

物不足過疎に味噌、米、薪があり
けったいな国捨てさせてケチらせて
琴よりも若者初春を乗り廻し
余り良く嗜れて無気味な北の初春

松江市 中川晃男

書初を老い一徹に書上げて
元朝の湖上三橋陽に光る
元朝の厨主なき影に冷え
洋食にやはり用あり妻楊枝

下関市 石川侃流洞

幸運の神は努力の側へ立ち
イライラへけしかけ下着の静電気
ごもつともごもつとも頼りない男
よろよると出たゴキブリへ寒の冷え

松原市 谷垣史好

人間が愚かに見える豚の鼻
磨き砂こんな物まで不足なり
生き甲斐をやっと見つけた買漁り
同郷とわかり煮豆屋まけてくれ

松江市 岡崎祥月

平凡に歩むしあわせ囁みしめる
消えていた品は値上げの顔で出る
現職の城ありがたや年明ける
恵方詣り今年の厄を捨ててくる

愛媛県 渡辺曉童

日の丸のことでもめてるのが日本
木石で行こ年金で生きるため
子の諫言の古き文体
寝物語りはお経より金

倉吉市 奥谷弘朗

酒やめて川柳までが遠ざかり
絶対という安心についおぼれ
本腰になったら尻に引っかかり
雑草で終る定年肩がおち

大阪市 天正千梢

再会へ心の波長乱れかけ
実り多い晩年をこそめざしけり

新築完成

母さんも新にしたいと言われそう
畳の香木の香にむせて年明けぬ

氷見市 関美子

嫌な夢バクに食わせて朝を出る
雑踏の中でも主婦と言う歩幅

席順も大卒と言う包装紙
夜の底まだくやしさが這っている

倉敷市 藤井春日

俺らにはかかわりの無い花便り
今のとこ眠れる獅子でいてやろう
終列車淡い別れを置いて去き
真実の苦言の中にある甘さ

姫路市 隠岐不酔

女房の酌 味が出て古稀むかえ
参観日隣ばかりが手を挙げて
灯油なき新年芽出たいを口ごもり

物価上げたストがインフレ手当くれ

大阪市 有 信 新之助

日本沈没ビルの重みに耐えている
子に意見憚るくらしを振りかえり
水漬もいっしょに理髪の化粧水
脂物に障りのできた友と酌む

出雲市 原 独 仙

無事越せた老軀を新春の湯に温め
七十年築いた愛の塔仰ぐ
人生の航路ラストの帆網締め

可動君へ

慶びを重ねがさねて鏡餅

大阪市 江 城 修 史

成人の日

成人の歩巾へ限りなきのぞみ
歪む世に苦労は妻にばかり過ぎ
世の隅に生きて失うもの多し
ふり返るゆとり許さぬ除夜の鐘

岡山市 横 山 一 声

不沈乗り切る賽銭ははずんどき
倅な正月甘える孫があり

樹氷の木の芽も春へじっと耐え
物価高の春へ嫁く娘の荷を案じ

夢語り終えれば次に又生まれ
岡山市 川 端 柳 子

不本意なくらし故郷をすてて出る
目に見えて大人になった子等まぶし
パッと虹画いて秘めごとある女

新宮市 大 矢 十 郎

青年の迷い吊皮だけが知る
大正の夫婦に並びのない歩巾
唄う気になれず娘の披露宴
立退かぬ人へ六法智恵づける

大阪市 川 口 弘 生

猪食うてそのままいびきをかくも老
勲章を貰うに人の枯れた芸
駅裏の道チト曲りチト曲り
脱俗の人の便りにドギマギし

松江市 柳 楽 鶴 丸

元旦や一と足早い子の春斗
除夜の鐘一つ一つが違う音
後半ヘスタートWベッド買う
妻の微笑モナリザにない魅力

岸和田市 福 浦 勝 晴

ふるさとの友から水のない便り
妻よ許せ赤いネオンが燃えるから
青空をわが物顔に靴磨き
何の灯かひととこ明かく昏れる山

春の来る峠信じて四十坂
京都市 都 倉 求 芽

雪淡くあわく都会に詩を降らす
売り出しの旗白じらし棚の品
鏡掛けおろして出掛ける顔になり

泉佐野市 村上春巳

文鳥が妻に懐いてちよつと嫉け
湯どうふへ財布ゆるめる京の味
六波羅の全盛しのお塚ひとつ
京女パンタロンはく六角堂

今治市 越智一水

その落葉その木の根もとにうめてやり
なごませる心に水の音があり
拝み合う心真実を愛し

狂ってる世へ狂わずに新春が来た

宇部市 平田実男

人生の坂道妻との歩を揃え
それぞれの想いで聞ける除夜の鐘
和服着て歩く男がきざに見え
地に眠る炭が笑った石油危機

岡山県 嘉数千代香

スプンおくほのかに別れゆく予感
強がり云う佗びしさがかくせない
七転八起つまずきそうな石がある
資本家の鵜となり今日の風に耐え

八尾市 高杉鬼遊

葵水から賀状はまだか甲寅

人妻になった噂を風が連れ
砂時計砕ける恋をしてみたし
放尿のいまさらながら北斗星

米子市 八木千代

暮れかかる道にも今日の歩をしるす
寅年のやはり張り子であった妻
雪道の子の足どりへ佇ち続け
渦に入るつもり無力な泡で消え

富田林市 岩田美代

歌留多とる過ぎにし恋の声上げて
冬の夜の善意にとりたい自己逃避
うぬぼれた過去が恥らいふり向けず
痛い程シャワーを浴びて疑問閉じ

富田林市 木村弥栄子

傷口をなめ合う余裕ない若さ
泪の量私を豊にしてくれる
入れ上げて五分五分恋の決算書
人の踏み固めた道の味けなさ

富田林市 和田維久子

娘と孫を帰す空虚な広い部屋
改名へ倅願うおろかなり
産声を聞かす術なし香ゆらぐ
散って尚、離れぬものよ枯れ松葉

鳥取市 両川洋々

煩惱の深さ菩薩をたじろがせ

落人の悲話も吊り橋秘めて揺れ
飛び乗った朝は車中で紅をぬり
茶柱も信じたくなる岐路に立ち

大阪市 金井文秋

着飾った母がよいときいやなとき
駄目な男にしたとは女気付いてず
まだ酒があるので飲み手立ちしぶり
生きる道ない故里をまだ慕い

大阪市 宮尾あいき

朝からハミング新年会の余韻
通じない電話に思いをつのらせる
若松に添えば虹バラ刺かくす

一栄さんの金婚を祝うて
五十年夫婦で積んだ金字塔

大阪市 河野君子

西出一栄様御夫妻の金婚を祝して（一句）
五十年両輪さらにリズムミカル
砂地でも女背伸びをしようとする

主婦の殻やっぱり脱げずに初春三日
盃を受く所作にも馴れて妻たりぬ

大阪市 柳原静香

嫁かぬ娘へ赤い花咲く春であれ
還暦の夫へ妬く程の愛は持ち

捨てないでよかった火鉢に湯がたぎる

山本有三さんの死

逝ってなお真実一路の鈴は鳴る

東大阪市 竹中肖二

不即不離やと平和が保たれる
世話好きがあっさり役を引き受ける
梟が鳴いておびえる逃亡者
税務署のなぜか冷たい門くぐる

東大阪市 竹中綾女

孫が来て子が来て正月らしくなり
画を添えた孫の賀状は飽きさせず
重病の友の年賀の字は乱れ
お節褒められ疲れふつとぶ母の顔

愛媛県 村上旭童

豆腐好き高い豆腐ときかされる
又しても売って戴く世が巡り
男五十なお失言をくり返し
腕でなら負けぬ男に酒があり

美禰市 安平次弘道

石庭の石それぞれに生きる位置
弱さ見せまい飾る言葉を探す
つまらない意地とは第三者の言葉
易の灯に足さそわれる日の迷い

島根県 堀江正朗

今日の幸 布団の温みから続く
朝のお茶妻の新聞ききながら
想い出す色あり南天つぶらなる

道しるべ妻の掌があり声がする

島根県

堀江芳子

いま逢えた涙また逢う日の涙

月芽えて寒さコチコチ音をたて

頬かぶりしての俤せかも知れず

夕焼けに抱かれて母に似たぬくみ

大阪市

中川滋雀

初詣(三句)

人の波紀元の森はほこり立つ

賽銭の雨不景気な風を切り

たこ焼きの香も参道に導かれ

足踏みをするまい重荷の夫婦坂

平田市

久家代仕男

世なおしのメス病巣には触れず

すさみ切る心をよぎる空っ風

魂も個性も持たず縫いぐるみ

理整然としてゆがむことのみ多き

松江市

恒松町紅

石油危機雪しんしんと降り積り

輪禍入院(三句)

左足のギブスに生命あるを知る

病院の元旦おめでとうともいえず

川柳が作れますよと見舞客

諫早市

原田明春

一票の差読んだか俺に頭下げ

中立へ右派と左派との年賀状
極寒へマネキンはまだ夏を着る
賽銭の割に拍手よう響き

西宮市

藤村ベ女

夕焼の丘を鍵っ子駆け続け

鍵っ子の心につめたい雨が降り

ちぎれ雲私の窓に夢をのせ

向いから欠伸が移る終電車

尼崎市

高津徹也

且つ論ず俺の信念通るまで

水車冬には淋しすぎる音

過去のものになりつつ愛故に哀し

修業は人の心を盗んで来

八尾市

大路美幸

女もうおんなになって紙をかう

膝ついて墓へ自慢の子が育ち

遣された筆で大きく父と書く

何もかも隠してくる闇が好き

倉敷市

野田素身郎

四十もなかばの春は寒いだけ

春近し妻髪型を気にしだし

春うらら議論も尽きてきた欠伸

意見容れられず屋台の灯を恋うる

鳥取県

鈴木村諷子

幹事もう日帰り旅行の種が付き

昼休み役場へ行けば昼休み
仏さま線香までも物が無い
おみくじに頼る心のもろさかな

大阪市 今西章雅

物価高に策あり寝正月と決め
節約が美德となった師走風
熟睡の出来る初老を幸として
フィンガーアクション歌聞くものか見るものか

大東市 土岐トク子

追憶を包むコートに身をゆだね
憎まれてはた憎まれても倫理説く
パンジーの早や春 足音告げにくる
仮面脱ぐ男寡黙の盃重ね

橿原市 岩井本蔭棒

男子われ妻に甘えてみたい日も
待ってました膳を跨いだ十八番
老朽の駅に夜汽車の詩残る
末っ子は自衛隊にでもするか

大阪市 室谷徹舟

日の丸を出して正月特級酒
年賀状束の厚さが顔の幅
鳩おりるところもおまへん初詣り
青い目の願ひ神様分るのか

三重県 川上大輪

微笑んで女は罪を消すつもり

まな板のくぼみに母の詩がある
嘘のない夫婦で笑顔絶やさない
初歩きしかと大地踏んでいる

竹原市 小島蘭幸

その中に意味深なものもある賀状
電線へ風ひっかかったままの新春
星空が選ってきたぞ石油危機
あなたと同じものでいいわ頼られて

兵庫県 遠山可住

年酒から今年も酒の世話になり
近代化こころの方を置き忘れ
悪運を断ち切る除夜の鐘と聞く
言いわけを石油のせいに年が暮れ

大阪市 黒田真砂

ちっぴけな倅でよし初詣
心の傷隠す女の薄化粧
初鏡せめて微笑み忘れずに
春鏡女欺瞞の顔うつす

岸和田市 葛城伊三郎

正直に答えりゃ巡査不審がり
石油危機炭坑節が恋しゅうなり
農に帰れ手の鍬だこが消えぬうち
仮病とも知らず電話へお大事に

話題もうつきてふたりの恋終る
貝塚市 野坂つき子

ほろ苦い想い出女傑にもあった
過去焼いて明日の愛へ身がまえる
人妻の恋は衿あしから匂い

鳥取県

川崎 秋女

母と娘の一言それで事が足り
悪妻を自負した夜の日記閉す
過去淡々と語って女に齢がない
北風の慟哭夫を娘を孫想う

島根県

榊原 秀子

ゆりかごの歌は心の隅におく
冬の雲光のほしい聖書絆く
紙を漉く出雲の里の水清し
信条のみち一すじに突き進む

倉敷市

竹内 翁童

期待する心が教育ママにさせ
合づちを打った心がうずきだし
年賀だけで初恋続いてる
まずパート切って不況へ身がまえる

八尾市

飯田 悦郎

ガソリン不足(二句)

複雑なガソリン車の旅日記
連日の高速マイカーを見る不思議
急がしい値上げへ活字が味方する
庶民をだました企業の話術

笠岡市

松本 忠三

丹前に靴下という三カ日
お済みですかと席をせきたてる
道順を親切そうなのにあたずね
住職のメモ法要の予約載せ

大阪市

西川 誓二

鰻に牡蛎それが王者の冬の味
冷え込みの中にも春の息が吹く
旅楽し溢れるいで湯に気もほぐれ
物高く自肅自肅の市場籠

竹原市

森井 菁居

飄飄として簑虫は春を待ち
酔うて来て話のわかることを言う
ふるさととは今(二句)

田を山にして農政に背を向ける
木枯しが消す百姓の叫びかも

柏原市

大峠 可動

源流の雫となるか春の雨
重い荷を担ぐと枯れた音が出る
ふるさととは我が人生の枕木か
春きたり雑草ときの声をあげ

島根県

小砂 白汀

八百長のルールで夫婦渡りきり
見せられぬ男の泪 酒を飲む
さりげなく礎石は塔を支えきり
わが辞書に悪と妥協の文字はない

枚方市 宮川 珠 笑

除夜の鐘聞きつつ走る救急車

回り飽きたコマは疲れた腰を振り

中年の理性信じて逢いつづけ

松打ちつけて飯場の門松

松原市 玉置 重 人

職人の自負が無口にしてしまい

目をつむり世の中まるくまるく見る

妊った笑顔がきれいな娘の話

十日 戒

お賽銭熊手で寄せて麻袋

堺市 高橋 千万子

過ぎし日を想う賀状を胸にたく

あるあるがないない時代子に教え

姉ちゃんの電話へ弟砂時計

もう少し歩きたいわと恋に酔い

大阪市 河股 緑 水

山国の故郷に送る鮭一つ

胸に一物楽しんでいる顔であり

雨だれが病む焦燥に輪を掛ける

夕暮れの慕情染しむひとり旅

呉市 植田 英 詩

土に還る暇なし埴輪掘り出され

娶るあり嫁くあり脛が狙われる

いまの娘は夫に尽くすとは言わず

易の灯へ女が来れば恋のこと

松山市 谷 の お

追っかけて来て豊作のみかん呉れ

寒風に晒してみても恥の顔

報われることなき驢馬の涙かな

毛糸帽乏しき頭あたためる

和歌山市 垂井 千寿子

四国の旅

仏前に留守を頼んで旅に出る

めずらしい駅名旅に来た気分

しじら織四国訛りに教えられ

なりたての寡婦も写真にポーズする

東大阪市 斎藤 三十四

六十歳わからぬ唄が氾濫す

屠蘇祝う膳へ値上げの愚痴まじる

還暦のまた一からの斗志湧く

第二の人生と云う好きな道

今治市 原田 一 風

去年より短かになって年暮れる

和服着て妻にも忘年会があり

おデートを減らしなさいと肌が荒れ

お茶筌の高値備前を敬遠し

岡山県 永宗 宗 義

愛情の強さに尖がる栗のイガ

ほころびる桜にそむく我を通し

西国へ土産話の句碑を建て
胸に手を当てて予言かみしめる

倉敷市 稲田豊作

土地ブーム家運に逆う子が育ち
枕して反芻して苦勞性
善人が善人と居て座が白け
猫柳雪を冠って春の呼吸

尼崎市 黒川紫香

駅みんな白く北国の朝に着き
貝殻が一つ転るげた冬の波
洗剤も土産に寮の娘が戻り

大阪市 木村水洞

子に云えぬ悩みを夫婦分ち合い
慾すててから人生観変り
税務署を知らない長屋羨まれ

守口市 村田瓢太

孫に嗜着させてシャッター押しまくり
逢引きの宿から出れば陽がまぶし
孫二人ふえる見込みの年明け

松江市 舟木与根一

野良猫のジャンプすばらしい十二月
十二月のんびり歩けば突き当り
元旦を知ってる松の枝となり

鳥取県 清水一保

初詣とにかく終って心足る

春の夢抱いて草木寒に耐え
げっそりとやせて闍魂だけが伸び

大阪市 児島与呂志

陽だまりに休む間もない小商内
人生の終着手頃な菊を活け
いたわりの言葉に女の愛見つけ

東京都 増田次章

生きすぎたと云う九十翁の瞳がきれい
目から鼻抜けな吾が子誇りにし
節約が美德の席に舞いもどり

伊丹市 小川静観堂

知らぬ間に茶のみの友となった今
お父さんへと嫁が替ズボン
音もせずまんまるい月が出た

柳井市 弘津柳慶

長女結婚
梅一輪ついに他人に手折られる
ローカル線どこの座席もよく喋り
嫁ぐ娘へ母何事もさからわす

鳥取県 森田布堂

火吹竹吹く世が来そう石油危機
飼い馴れた猫が上手に戸を開ける
両の手を握って欲の世に生まれ

兵庫県 大江秋月

物金水みんな不足の年が明け

鞆の破れホッチキスで止めておこ
停年も迫り一日はや暮れる

岡山県 池田古心

長い髪、爪染めていぬから男
愚にもつかぬ事べらべら女なる
日本の善まだ生きていた初詣

兵庫県 河原みのる

もの忘れまだ解つてゐる脈がある
候ぶみはいいなアおしたい申し上げ
ご恩一生忘れませんが死刑囚

奈良市 宮口笛生

冬眠の尽に蓑虫焼かれたり
はげましの嘘をうれしく聞き流し
真つすぐに生きて明治をふりかえり

岡山県 出原敬一

役どころ心得て来る割烹着
女対女の報復ゲリラに似て
死刑囚死ぬる思いで生かされる

大阪市 神谷凡九郎

その時そこに君だけが居てくれる
茨道その果て 果てのひとりぼち
信じない心で合わす手でもある

大阪市 河井庸佑

卒業式
六年の努力の証書しかと受け

うれしさの中にさみしく母校去る
卒業へ思い出走馬灯のように駆け

小松市 馬場魚山

売れ残るパンはもうけを子に持たせ
意地悪な女心へ歯を見せず
家庭風呂足を伸ばせぬままつかり

広島市 山田季賛

和服着りや妻を少しは見直して
本音吐く頃ぼつぼつと酔がさめ
真実は女の方に聞いてやり

倉吉市 渡辺菩句

黒い犬結果は黒と命名し
神さまの遊びふるさとに雪降らず
正月がすぎると胃が悲鳴をあげ

大田市 藤田軒太楼

一年の計屠蘇に躍らされ
石油危機虎が炭焼く賀状来る
列島をアラブの神が迷わせる

生駒市 草深醉升

方便の嘘さえとてもつけぬ性
近江紅葉パラダイス行

光秀が殺られたあたり鉾が見え
逢阪の関もらくらくパスの旅

富田林市 浅川八郎

明治の雨大地に浸みて悔ゆるなし

強いこと言う者の瞳に泪あり
遣る瀬なく慰め得んと孫に倚る

羽曳野市 塩満敏

細い腰めざして妻の美容食
臨月は掛け声あげて歩き出し
三カ日せめて朝湯と朝の酒

大阪市 神田秀峰

額程の土地植木を雑居させ
冷戦の夫婦互に鍵を持ち
糊の効く敷布を逃げた鬼瓦

大阪市 飛田好一

文化の日一句が浮ぶ菊香り
ケチケチのムードで年のファイナーレ

断酒五年

五回目の空盃上げて春迎う

米子市 増田竹馬

ユーモアを伴奏にして人生譜
神様はみんな上戸であらせられ
希望とは逆なコースが板に付き

東大阪市 落合思月

三日目もまだすねている妻起きず
さんづけで呼び合い打ちとけない夫婦
ほのぼのと母娘一合の酒に酔い

大阪市 藤田頂留子

いいますわモニターきどりの口答え
いっぱしな顔で墨画を賞めておく
はったりもこれまでというみじめ

島根県 大塚勇

寒修業うつつに聞いて床の中
銀婚のまだこれからの共稼ぎ
新築へ風邪を引くたと云って来る

大阪市 津守柳信

マスコミに負けたお人の列が出来
国外で雨に逢うてたお正月
時差ぼけが治った頃は風邪を引き

茨木市 吉川米子

消費者が消費者を食う物漁り
家族写真一番小さい母嬉し
明暗の境でひびく除夜の鐘

西尾 栞

書齋よし服喪の初春をこもりけり
正座して墨する部屋の桜炭
手に入れた古墨に父の上機嫌
墨すって父の道楽それでよし
墨の香に思案の言葉目を閉じる

菊澤 小松園

悪徳の榮え物価狂乱す
奇魚となつても生れた水をまだ泳ぎ
酒のない膳へ黙って箸を置く

犯されず犯さず話さず隣同士
老人ホーム明日の福祉は間に合わず

睡月の国東巡り

国東の旅み仏にみちびかれ
み仏の里を巡りて老い二人
石仏の肌さむざむと小雪ふる
同行二人仏の里に杖をひく
カメラアイみ仏も笑み給い

三月の机上正月からのもの

若 本 多久志

北 川 春 巢

バラの芽が出だして施肥を思い立ち
予備校へ半分ボーイハントの気
おとうサマと嫁に呼ばれてこそばゆし
琴持って興入れという嫁が来た

川 村 好 郎

わけもなくライター鳴らし孤に堪える
松葉蟹もう横ばいでない高値
祇王寺の風のままなる枯もみじ
福笹を金庫にかざり中はから
口金のきかぬ財布で冬を越し

選を終えて

若 本 多久志

自分なりに出来る限りの努力を続け
て、どうやら次年度の選者へ、バトンタ
ッチをすることになりました。

編集局からの要請で「その感想を……」
とのことで、二、三愚考を述べさせて頂
きますと、

一番残念に思いますことは、昨年四月
号で「同人各位へのお願い」として、締
切期日の厳守と、投句用紙に当社の柳箋

又は、同寸法の用紙を規定して頂くこ
と、及びくずし文字はよく誤読しますの
で、差控えて頂くようお願い致しました
のですが、三つの内、一番目と三番目は
完全なまでに、お聞き届け下さったの
に、二番目の投句用紙についての規定だ
けは、ほんの四五人の方ですが、最後ま
で実行して頂けませんでした。

用紙の不揃いほど、神経の細い選者に
とって気になることはございません。

なお序に、困ったことと申しあげると、
「あて字と、難解の文字や言葉」（方言
を含む）で、一人の作家の十句を選ぶの
に、国語辞典、漢和辞典、方言辞典を
二、三度も繰らなければならぬ時に
は、泣きたいくらいです。

その為に気が散って、選をそこで中断
することもある訳でございます。

一昨年の選者、生々庵氏も、昨年の栞
氏も述べておられるように、二千句余り
を一句一句、慎重に拝見してゆきますの
には、五日乃至七日はかかります（毎夜
三時間程度）。

この事は、各位の労作に敬意を表する
マナーであると共に、何十万人の全川柳
家が注目される「我が川柳塔欄」の品位
を落したくないことと、願望と、伝統あ
る路郎先生の句調を残したいという真摯
な気持からであることを諒察下さっ
て、今後共、推敲を重ねられての玉句を
お寄せ下さらんことを、祈念してやみま
せん。

長生きを

高 鷲 亜 鈍

長生きを見越し齒医者に妻通う
自信作没は悔しい原稿紙
蒲団を乾して蒲団を叩くのが役目
ばく以外みなよくやってると感深し

五千歩で汗びっしょりは畳の上
五時起床お水を頂き座行と居眠り
子供から可愛がられる老の無邪気さ
先のない僕を自分に云い聞かし
年功に頼着しない男女の戯
過剰でも品不足でも儲けてる
成金の哀れさ大豆石油売ってくれない
一億総下痢トイレットペーパー買いしめる
孫沢山誰彼無し七五三

ばろくそに夫を云うな聞き辛い
恋愛の果の夫婦喧嘩に取合わず
男ごころに無理解な四十女とは長女
筋違い夫の不埒を父に寄す
老婆の惚気爺さんのことに触れ
午前さまにははやい週末の若旦那
宿直の翌晩も遅い御婦還
若旦那いつまで世話をやかせる気
気の効かぬ息子へ親父の無口

近 作

大 洲 市 米 沢 暁 明

食い違う時に夫婦の顔他人
川の字にねて幸せがそこにある
落ちぶれて住んで世間の風を知る

東 京 都 池 口 呑 歩

節約へ美德あわてて向きを換え
貰われた子はじめての賀状書く
サン格拉斯美女を見つけた初すべり
あれは恋これは商談マダムの瞳

今 治 市 月 原 宵 明

ひたむきに生き盲点を子に衝かれ
子には子の人生とやら親を捨て
不孝した挙句遺産は持ってかれ
嫉するにも床の間がない団地

今 治 市 長 野 文 庫

鶏の瞑想わくら葉が破る
哀歎の歴史包丁丸うなり
網棚の風呂敷ただの旅でなし
咽喉ぶえが男の鳴咽のみ下し
塵払う造花まだまだ共稼ぎ

岐 阜 市 市 川 鱗 魚

器では無いがと称し立候補
人生に長息 長生きあるを知り
コーヒーの次はすし屋と恋進む
日本流ノック代わりの咳ばらい

俳風柳多留廿五篇研究

(一)



岡田 甫

(近世庶民文化研究所・主宰)
〒248 鎌倉市大町4-4-27

清 博美・青木迷朗・室山三柳
八木敬一・西原亮・入江勇
紀内恒久・鈴木黄・岡田甫

1 御具足へ枝をならさぬ風を入れ

清一 鎧・甲冑など武具の虫干しを詠んだ句である。「枝をならさぬ」は謡曲「高砂」からの文句取りで「四海波静かにて、国も治まる時つ風、枝をならさぬ御代なれや」とある。

武者一人叱られてゐる土用干
大将と見へやうがなと暑ひ事
など、泰平の世ならではの句である。

八木一賛。巻頭にふさわしい。
青木一賛。

甲冑に樟脳匂ふ太平さ
逃げそうな武者だと笑ふ土用干
暑がりの癖にいらざる鎧着る

西原一具足櫃のなかに春画を入れてあったことは、次の句からもわかる。

組うちを具足櫃から出して見せ
組うちの図も入て有具足櫃
和合は「高砂」に通ずると考えられるから、

いっそう文句取りが生きてくると思われる。

室山一 武具の虫干し賛。

岡田一 艶画まで考える必要はないと思う。

2 春雨の御哥吾妻の御土産
清一 どうもよく分らない。そこで「柳多留全集刊行会」本で確かめてみると、「春雨」が「春様」と読める。テキストを勝手に読み替えてはいけないのだが、以下「春様」として解を試みる。

尾州宗春に落籍された名妓の名は、春日野である。春様とは、この春日野をさしているのではなからうか。すなわち、尾州宗春の江戸からの土産は、遊女春日野の詠んだ歌であるとの意。以上駄労解。

八木一 全集本の方が刷が後のようであるから、私も「春様」が正しいと考える。読みは「ハルヨウ」であろうか。

句解は駄労ながら、業平の東下りととりた京をくらってなりひらハ哥まくら
五人目のドラは吾妻へ旅をさせ
吾妻下りで名の高い花になり
「かきつばた きつつなれにし つましあれははるる来ぬる 旅をしぞ思ふ」の歌でよいのではなからうか。

西原一「春雨」か「春様」かで解が異なるが、「御歌—貴人」「吾妻からの土産」を考えて、日本武尊のことではないかと思う。

巻頭第二を飾り、連歌の起源は日本武尊の吾妻土産に依るものだぞとの、例の江戸っ子自慢ともなろうというものである。

室山一 どうもはつきりしない。わたしは「春雨」として考えたい。謡曲「熊野」の後半、清水での宗盛との花見の場と考えてみたのだ

が。

— 22 —

入江―「春雨」の解として、三月上旬勅使下向。春雨の季節で江戸逗留中降り通される。

御とうりう中春雨を詠ぜられ 安元・松1

岡田―原本は「春様」だから、「春様」は了解すべきと思う。しかし難句。「春様」はハルヨウかハルサマか。ハルサマなら礎稿の宗春公が適切。ハルヨウという語も少し奇妙だが、貴人の歌ではある。吾妻土産だから入江氏説が一斑に穩当と思われる。

3 四たび目の勅使ハ礼に行之也

清―謡曲「雷電」による句。菅公の亡霊が、叡山の師の法性坊の許に至り、「我梵天帝釈の御憐みを蒙り、鳴る神となつて内裏へ落ちて、我に憂かりし人々も蹴殺すべし、その時僧正を召され候べし。されど構へて御参内あるな」と云つた所、僧正は「王土に住めるこの身なれば、勅使三度に及ぶならば、いかでか参内申さざらん」と答える。

暴風雨と落雷におののいた時平は、法性坊のもとに勅使を走らせた。一、二度は法性坊もとりにあわなかったが、勅使三度に及んだので、参内してこれを静めた。しだがつて、本句のように四度目の勅使は、その礼に行つたのだということになる。

四度目の勅使ハ行キ人多いなり

叡山へその日に勅使四度たち

青木―賛。

雷りの僧正なと諸卿ひ
僧正の鼻は其の後高くなり

安七・信2
五六・9

宮一・3
三一・6

西原―賛。帝のおほめを持つて行く。

室山―同。目下川柳雑誌「きたぐに」に「古

川柳と謡曲漫筆」を連載中であるが、たまたま「雷電」を執筆したばかり。そこへも記したが、この話のもっとも古い「大鏡」にはこのことなく、やはり「太平記」が素材になっている。そして句を眺めてみると、謡曲ではなくて「太平記」によつたと思われるものかなり多い。江戸人が「太平記」を好んだという証にもなり得よう。

入江―賛。

三度目ハなき出スような勅使来ル

岡田―賛。

安七・智1

4 秋の田へ白い手の出るおなくさみ

清―百人一首の第一番は、天智天皇の「秋の田のかりほの庵のとまをあらみ、わがころもでは露にぬれつつ」である。この歌から「秋の田」を引用して、百人一首を暗示し、「白い手」で嫁を連想させて、百人一首遊びを詠んだ句。

花嫁の手際秋の田刈如し 二八・4

秋の田を嫁や娘でこねかへし 一六一・15

室山―稲刈りと百人一首のむすびあわせ、賛。ご承知の通り、嫁はカルタの名手。

入江―賛。

秋の田を二百十日に生酔する 二六・九
田毎程月を並べる歌かるた 五八・21

岡田―賛。

5 有かたたく出る御白洲ハ親子連

清―一般に御白洲へ出る場合は、御さばきを受けるためであり、いわば常識的には罪人が出頭する場所である。しかし、それとは別に、御ほうびをいただくために、親子共々御白洲へ呼び出されることもあった。御触書から、例を引いてみると、

天明二寅年五月
御勘定奉行

辻六郎左衛門御代官所

下野国那須郡東沓掛村

百姓

利左衛門

銀式拾枚

右之者、親え孝行仕候二付、被下之など、その例は非常に多い。

八木―賛、本句、どのような場合か不明でしたが、親子対面、のようなことを考えていました。親稿によりスッキリしました。

西原―孝子節婦を賞することは、江戸幕府の政策であつた。

入江―同。御褒美は米十俵のときもあり、銭とは限らなかった。

岡田―賛。

6 千金の夜なべハおひざもとて出来

清―不詳。検校を詠んだ句か。

八木―「日千両」という語があつて、これは、江戸において毎日千両の金が落ちるといわれる土地の称。すなわち、魚河岸・芝居の

二丁町・吉原の五丁町の三ヶ所である。

日に三箱ちる山吹は江戸の花 七一・8

三ヶ所へ千金の降る繁昌さ 三八・5

夜と昼朝とへ落ちる日千両 六四・6

などは皆その例句。千両の夜なべが、將軍家のおひざ元、江戸吉原でできるといふことであらう。

紀内―八木氏説のようなことか。

青木―後出句に「千金の明りで式部夜なべなり」(二五・29)で、源氏物語ならん。

西原―八木説賛。「おひざもと」は御府内、「夜なべ」は夜の業で吉原。日に千両の繁華さを述べている。八木氏例句の第三番が適切で、トップが吉原である。

千金を日毎さつかる御神恩 二七・18

青木氏の「千金の明り」は「名月」で石山寺の月。

室山―右に賛。吉原であらう。

入江―同。吉原であらう。一夜千金の場所。千金の場所ハ餅やも竹に虎 四二・18

(竹は吉原の竹村の最中、虎屋のまんじゅう)

岡田―吉原説、賛。

7 下駄の上にたゝん事かたきハ笠

清―吉原に豪遊して、名前を知られた人物が幾人か居るが、仙台侯伊達綱宗と尾州侯宗春もその内に入る二人である。綱宗は伽羅の下駄をはいて高尾に通い、宗春はべっこうの笠をかぶって、春日野のもとに通いつめた。

本句は、『古今和歌集』序文の「人丸は赤

人がかみにたゝむ事かたき」を文句取りにし

て、高尾に振られた綱宗と春日野を落籍した

宗春の二人を詠んだものである。

まことの傾城買ひ笠や下駄なり 二二・11

はいたハふられかぶったハもてる也

西原―賛。『古今集』序の文句取りだが、意は「同等」ということである。

岡田―同。

8 六十帖も紙の入るものかたり

清―「六十帖」とは、『源氏物語』五十四帖をまるめて表現した語。

京染も六十帖ハ美しい

此条で六十帖をつづるなり 四九・15

(此条で紫となり紫式部を表わす)

などは『源氏物語』を六十帖で表現した句だが、なかには、

いし山で一わり引ケの書物出来 二二・2

石山の草紙一わり引ケで出し 三四・4

など、六十帖より一割引いて五十四帖とした理屈っぽい句も見られる。

青木―賛。

内陣を六十帖でおつぶさき 明八・礼1

寺入をして六十帖したゝめ 傍三・27

室山―同。六十帖説は、謡曲「源氏供養」に「我石山に籠り、源氏六十帖を書き記し」とあるのによつたものと思われる。

岡田―同。

9 きれ／＼によむ面白い哥枕

清―在原業平が東下りの途中、三河の国八橋に着いたところ、かきつばたが咲いていたが、これ見て、

ある人の曰く「かきつばたといふ五文字を句の上にすへて旅の心をよめ」といひければ、

から衣きつづなれにしましあれば

はるばるきめる旅をしぞ思ふ

とよみければ、皆人乾飯のうへに涙おとしてほとびにけり。(『伊勢物語』)

ということになった。本句は、これを詠んだもの。

なるほどと指を折らせる杜若

中將の道草に折るかきつばた 五九・12

から衣ぬいめ／＼にほねをおり 二二・41

八木―歌枕、ということばから、『伊勢物語』全体のことを指すのではないかと考えていたが、

京をくらつてなりひらハ哥まくら 一八・38

紀内―礎稿「かきつばた」説賛。

かきつばたは哥人ハちぎり／＼よみ

青木―礎賛。「きれ／＼によむ」だから「かきイツウばた」は動かない。

かきつばたいたまぬやうに公家ハ打

明四・義2

かアキイツウばた成る程杜若

西原―賛。でも「面白い歌枕」とは、具体的に「ハツ橋」か「かきつばた」か。「きれぎれ」の方は杜若であるが、一般に歌枕は名所を指すやうで「ハツ橋」となろう。依つて、

傍一・28

傍一・28

傍一・28

傍一・28

傍一・28

傍一・28

傍一・28

傍一・28

傍一・28

傍一・28

傍一・28

傍一・28

傍一・28

傍一・28

句意は「ハツ橋というところで、杜若を折句歌にしたとは面白いことだ」となるう。

室山—賛。謡曲「杜若」にも
岡田—賛。

10 僧正になって枯木に花がさき

清—古川柳に詠まれている僧正には、個々に有名な人物がいる。例えば、法性坊、梗の僧正、僧正遍昭、鳥羽僧正などなど。しかし、本句の場合は、どの個人とも結びつかないようである。したがって、一般の僧正を詠んだ句と解釈して置く。

すなわち、僧官の最上級の地位を得たことによって、脚光をあびるようになった一人の僧侶を、あたかも枯木に花が咲いたようであると評しているのであろう。一般の人々の僧正に対する羨望と皮肉の感情を表現した句か。

八木—同様、個人と結びつけるには困難があるが、強いていえば志賀上人か。上人は京極家御息所に一目惚れして、その御所の庭に二日半たたずんでいたという。御息所は憐れと思い、御簾の中から手を出して握らせた。上

初春の初子の今日の玉簪

手にとるからにゆらぐ玉の緒
御息所、返し、

極楽の玉のうてなのはちす葉に

われをいざなえゆらぐ玉の緒

紀内—限定する必要なし。柳雨氏の「川柳風俗志(上)」三八八頁に、この句引用。「紫

衣緋衣などを意味す」と注あり。年寄りが緋の衣を着たところが、真に「枯木に花」である。

青木—先行吟に、

緋の衣着れハ浮世がおしくなり
一・5

があるように、主題句は紫衣緋衣の外見上の華美のその裏に高僧にあるまじき浮いた噂の匂いがし、婉曲ではあるが、女犯に対する辛辣な罵倒があるように思われるが、如何なるであろう。

西原—礎稿、紀内、青木説に賛。「枯木に花」というのは「①衰えたものが再び栄えること、②望んでも実現されない物のたとえ」。依って、青木説がどうしても浮びあがってくるようだ。

室山—礎稿プラス紀内説賛。

入江—同。僧正は僧官の最高位であるが、枯木のような老令に花が咲いたとて、何の意味があらう。いささかベシミックな句解だが。岡田—僧正の上に大僧正がある。最高位ではない。やはり衣の色からの句。

11 おく様に十ヲ若いので御意に入り

清—どうもハッキリしない句。殿様が若い腰元あたりに目をつけて、妾にしたという句か。

八木—礎稿で良いのではないか。新しいお妾が奥様より十才若いので、大変お気に入りだ、というだけのことであらう。

紀内—賛。妾である。

奥様ハ正風ていの御むつこと

二八・13

奥さまに勝って兜をうみ落し
拾初・31
これらは、皆裏に「妾」がある。また、奥様—妾の句多数あり。従って、この句でも裏は妾と断定して良いと思う。

青木—礎稿および諸説に賛。「おく様に十ヲ若い」がこの句のミソ。

西原—賛。殿様と同じ年あたりか、ともすれば姉さん女房の如き奥様が「政略結婚」のためにあつたから、若い妾が殿の御意に入るのであらう。なお、男たるものをとると、若い女ほどよろしい。隠居と新造も同じ心境ならん。

室山—諸説に賛。しかし「姉さん女房」まではいかが。
岡田—同。

古川柳の専門誌

『季刊古川柳』

お問い合せは、

左記宛にどうぞ。

〒214 川崎市多摩区三田五—二一四

「川柳雑俳研究会」

川は流れる

東野 大八

今年の正月は、イヤな一年の幕明けだった。石油不足のモノ不足、インフレ昂進—そんなものではない。人間、半世紀以上も生きれば、こんな現象の二度や三度は珍らしいことではない。私がイヤな引幕だというのは、なんとこの私が、今年六月には還暦というのである。はっきりその御托宜をうけたのが、こともあろうに元旦の酒の中である。一べんに不機嫌になつて私は索然とこう口走った。

「還暦？冗談じゃない。おれが六十の齡なんて、聴いただけでも肌寒うなる。二度とは左様な不吉なことを申されるな」

そんな迷惑千万な話に、そうそうにして席をたち、二階の書齋に引きあげた。心中甚だ面白からずで、どつかと机の前に腰を据えた。とたん、膝さきから一冊の本が顔を出している。とりあげてみると、さる雑誌の特集本で「万有こよみ百科」をばらばらと綴っている。とひよいと出たのが還暦の項——。

「大正三年は甲寅（きのえとら）であつた

から、満六十年を経た昭和四十九年はまた甲寅である。従つて大正三年生れの人にとつては、昭和四十九年は、自分の生まれ年の干支が暦の上で一週し、元に還るわけだから、これを還暦として祝う」

とある。まるでおれのために書いてくれているようなものである。チエツと舌打ち一つしてそいつを机の向うへほうり出した。

私は生まれつき、干支九星などというものは根っから信じない男である。大安、友引、三りんぼなどというものは明らかに迷信である。新聞配達や、味噌醬酒の御用聞きが、むかしからよく高島易断、昭和何年版神宮館運

勢暦なるものを持ち込んでくる。毎年、年の暮になるとこの薄べらな赤ハンコに墨黒々とした奴が家中どこにでも転がっている。しかしただの一度もものぞいたことはない。やれ今年のは丸いのが真黒だから運勢が凶だの、やれ真白だからうれしや吉運だのと、女房娘どもが一喜一憂しているのをみて、フンと鼻先でわらつておいてそれでおしまいだ。

この暦が世に出たのは明治十二年である。系図買いをやらかし、刑務所にほうり込まれた高島嘉右衛門というのが、その獄中三年間に考へ出したのが、運勢暦九星である。

九星というのは、一から九までの数に白黒碧緑黄赤紫の七色（白は三回使用）をつけさらに五惑星を押しつけたものだ。易とは全く無関係のしるもの。嘉右衛門は、これを方陳にあてはめた。方陳とは一から九までを一辺三で三つ割にした四角形の中に適当に並べるとタテヨコどの方向もすべて一五になる、その図形をいうのである。数の神秘感のようなこいつに彼は九星をこじつけて九星術と称した。これを本にして売出したのが、さきの高島易断・神宮館運勢暦だ。

私が氣を悪くしてほうり出した「こよみ百科」をあとでとりあげて調べてもちゃんとこのことをさらにくわしく説明して「迷信なり」と明確に断定を下している。

さて、私が氣を悪くした還暦の一件に話を戻そう。

還暦に反発する私の心証には、別個につきのことき確たる理由がある。

終戦直後のガラクタ動員で兵隊になった私が、兵室で床を並べた補充兵に、某という先輩の人物がいた。ある日のこと、私の両腕の二の腕の腹に、寸分ちがわぬホクロがあるのを見て、彼はそろえたその両腕をじっと見比べたあと、これは大凶だと断じた。つまりどちらかの一方のホクロが缺損するというのはある。早くいえば片腕を無くして隻手となる

というわけだ。このとき彼は、いま一つ余計なことを私の耳に吹き込んだ。

「こんどの戦争にもし貴方が片腕だけを残して生き残った場合、貴方は六十代の齢まで生きられるが、三年にして死ぬ」

当時はまだ三十代のかかり、六十三の齢で死ぬとしても、その命数の在り処は小手をかざすほど遠かった。では今度の戦争では生命は救うことだ、有難う、アリガトウとこきげんに笑って私

「では、お前の生命の方はどうなる？」

「程なく私は敵の鉄砲弾で死にます」

同じところから同時に召集された顔なじみの人事係の準尉に、後日この一件の話をしたあと、彼は何者だ、とたずねたら高島易断でも名のある易者だと教えてくれた。フーニーでそのときはすんだが、怖るべき彼の予言はピタリと適中したことだ。私は註文通り戦傷のため隻手となり、それを見届ける以前に、さきの易者は早いとこ戦死してしまったのである。腕のホクロといい、わが生命今日限りの生命といった彼は御託宣通り鉄の弾でドンコロ。こう二つまた見事適中とあつては、氣にしないといえばウソになる。戦後、四十、五十と馬齢がピッチをあげるにつれ、六十三の大厄が、雲がくれの月が明鏡に変ずることく次第に私の脳中にくっきりしはじめた。高島易断の本をさえ黙殺に出る私の潜在意識は、実のところそんなことに由来するためではなかったか。

この正月、私が還暦ということをかきされ心内いさかギョツとなり、然るのち不機嫌に座を蹴ったのも、実のところ六十歳の恐怖にはかならないのではないか。命数変え難きものとすればあと三年。一千日だ。

もつとも、戦地その他で死に損うこと実に十一回。死にずれしている点では人後におちない私だけに、五年前からすでに遺言状はちやんとかいて、仏壇の抽出しに入れてある。遺言状の中は至極アツサリしている。絶対火葬のこと。その灰は残らず家の前に流れる木曾川の水の上に捨てろ——私のいま住んでいる部落は、永年の風習からすべて土葬である。四国から岐阜のこの地へきて養子となった私の家の代々の墓地には、苦むして文字も定かでない古墓がなんと百以上も目白押しだ。そんな人体もわからぬところへ、永代不易坐り続けて小さくなつてゐるなんて思つても気が滅入る。そんなことより、私の骨粉がま

ず木曾川の水に乗りやがて伊勢湾にでて、いつかは大陸の彼岸に漂いつくであらう。そこには私の片腕が眠っている。不滅の靈魂、やがて先着と一つになり、五体そろつて成仏をとげる。ナムアミダブツの寸法だ。その魂胆故の水葬志望である。

森鷗外は「風葬」という随筆に、わが骨を砕いて山頂から海に向つて撒いてくれ、風のまにまき吹きちらすその風葬がよい、と書いている。ところが晩年自分で戒名を選び、その題字の練習ばかりやっていたそうだ。そんなことなら要らぬことを書かねばよい。

この点、永井荷風は立派だ。彼は遊女二千五百体の眠る浄閑寺の中に、荷風山人の墓と書いた杭だけをたててくれは言うことなしと遺言している。名古屋市のさる財閥の社長が私にこう言つて死んでゐる。

「ある新聞の死亡広告に『御香典、花輪の類は堅くお断り申し上げます』とかいてあったが、おれの広告には花輪お断り、香典大歓迎とかいておく。推定一千万円は集るだろうからそれを育英資金としておれの名をつけて残す。墓石は二十年で字が消えるが、こうしておけば墓よりおれの名は長持ちするよう」私も花輪お断りで八十万円にはなるだろうから、その金を川柳界に「お騒がせ料」としてでも寄付しておくか。とにかくあと千余日も半分寝てしまえば正味五百日。大分忙しいことになりそうなので、近く遺言状を改訂しておくことにしている。

橘 高 薫 風 著

「肉 眼」 売り切れ

おかげ様で「肉眼」は予定より早く売り切れました。お礼申しあげます。

川 柳 塔 社

路郎賞
川柳塔賞

候補作品中間発表

自 四八年十月号
至 四九年一月号

路郎賞候補作品

若本 多久志
(到着順)

ステテコで我天皇を羨まず
やりばない心の迷い香をたく
檜山へ背負うて呉れる子もおらず
魂を洗うた涙 頰伝う
指繰れば冥土の児にも嫁が要り
逆境の友へ秋風そつと吹け
頂上は小鳥に残す柿と決め
泣くときに泣ける路傍の石でよし
貧乏を愛しきれない詩をつくる
ときつける櫛へ炎はさめやらす
指触れて確めるより菊の香の
鈴虫の骸じ茄子を喰い残し

正本水客

工藤 甲吉
高橋千万子
藤井春日
鈴木村諷子
西川 誓二
原 独仙
能登原白水
松下梁水
越智 一水
木村弥栄子
堀江 正明
小砂 白汀

それぞれに話が異うピヤガーデン
こうろぎのひげがあわてる膝の上
鈴虫に死ぬべき覚悟うかがえず故垂井
敗北の利那を飾るのも女
穴道湖のあかりめざして高ぶりぬ
年の瀬に身を置きたくて街へ出る
酔いっぶり明日は起きて来ぬ男
後添いが取りしきつて三回忌
緞帳の上がるがごとく女脱ぎ
洗濯好きの妻に着ごろを脱がされる
松茸も食わずうかうか秋がすぎ
中年や父に優しくならうとす

北川 春巢

傍島 静馬
村上 春巳
小出 智子
山川 阿茶
藤井春日
神田 秀峰
恒松 町紅

西尾 栞

石だたみの余韻 歴史が通り過ぎ
心ぞうの機嫌とりとり京の街
盆栽の乱れ暮しも乱れてる
歩道橋過去は跡方なく流れ
無い袖を子に振り夫婦寝正月
ポイントはないさコンニヤク男なり
手付金これが苦勞のはじめです
珍客へゴキブリまでしゃしゃり出て
そこまでは割りきれませぬ対話する
わたくしの作った案山子にハツとする
七味たっぷりかけて人間不信の日

高橋 操子
鈴木村諷子

嘉数千代香

真つ白な灰になる身と思われず 有信新之助
痒い痒いと云うように踊るゴーゴー

ターミナル第一期一会の群ならず 柳葉 鶴丸
泣くときに泣ける路傍の石でよし 中川 滋雀
お話しがあるのと妻に座らされ 山下 静水
球根のまんまで終る性哀し 河野 君子
此の人もうなずく事を知らぬ貌 岩田 美代

川村好郎

夫の墓碑せめて私の名を添わせ 宮尾あいき
隠健を徳となすなり福寿草 橋高 薫風
北まくらさせた姿の日本地図 不二田 一三夫
耳を閉ざせ風は言葉をつくるから 関 美子
石だたみの余韻歴史が通り過ぎ 正本 水客
再会へ指輪の位置が気にかかり 高橋 鬼焼
銀婚の道探り合い認め合い 八木 千代
見えぬとこ結ばれている夫婦岩 川口 弘生
空いている方の寿司屋を通り越す 大坂形水
炎の輪くぐり抜けければ凡婦かな 三井 酔夢

菊沢小松園

ステテコで我天皇を羨まず 工藤 甲吉
見失なうまいと私を見つめてる 小出 智子
耳閉ざせ風は言葉をつくるから 関 美子
だまされた日の合鍵は温かった 江城 修史

川柳塔賞候補作品

大坂形水

想い出に生きてガラクタばかり増え

仲原 己恭

まだ先が見たい老眼鏡を拭く

大林曲ん手

落ちつかぬ花むこ様をたしなめる

竹内花代子

ピアノ鳴る不渡り出したとかいふが

秋月 宏方

定年者歓迎月給書いてなし

同村与さく

借り毛布元軍人としてたまたみ

渡辺伊津志

恩師会うたびに妻君元氣かね

山根 白星

貧しさは何でも両手ですつかむくせ

阪上十止庵

(夫の急死)

鮑研ぐ身ぬちに泉湧くごとし

三宅 不朽

戸田古方

言葉にもいろんな温度ありました 岩本笑子
疑わずゆるる振子の中にいる 谷川 渥子
ユックリズムやはり隣が気になって 栗和田清子
生れつきだとは思えぬ不器用さ 鎮浪 翠月
われない食器で食べるまじい飯 内藤ますえ
帯結ぶのにお隣りのおばあちゃん 落合思月
俺なりに生きる手相をジッと見て 大林曲ん手
ざくろの実なにか言いたいような口 岩田 三和
女房よ柄はタンスで年取らず 古野 伶人
妥協性愛し最長不倒距離 堀口 欣一
引金に指掛けたまま説く平和 麻野 幽玄
汚れても波の形は瀬戸の海 今井 松花
若者の休日となる敬老日 吉野 富子
恩師会うたびに細君元氣かね 山根 白星
末席は採決の時見渡され 岸本豊平次
よりどころなきを笑顔にしてみよう ふきあげ虎城
コレクション柱時計がチンと鳴り 大塚 豊生
留守番へ働く者のぐちを言い 竹内花代子
鮑研ぐ身ぬちに泉湧くごとし 三宅 不朽
記念撮影人間様を盛り合わせ 川上 富子



北川春巢選

東京都 山根白星

先代の恩は手文庫から袱紗

コラーンの片っぱ剣を手離さず

終末にフォッサ・マグナの如き腰

年下に貢ぎ朝寝をする女

喝采の手は時として首も絞め

大阪市 阪上十止庵

三分で夢をまとめる赤電話

成算あって大寒の風に向う

幸せの鈴耳たぶのうすいひと

美しく飾り葬儀屋無表情

和歌山市 秋月宏方

白髪染め金婚式に写す顔

極楽浄土行けば便りもしてくれず

人生行路時には歩く回り道

落葉掃く姿悪人とは見えず

東京都 宮崎美津子

年賀状の厚み豊かに古世帯

万物のところ得ている元朝

二人連れよけてよけてひとりの雑踏

聞き耳が齒みがきの手を急に止め

とぼしさが詩に見えてるわが暮し 和歌山市 樫村ふみよ

手内職はさみの音と虫の声

人目には仲良く見える手内職

たのまれたついでの用にひまかかり

お相伴しますと上戸目を細め 大和郡山市 森田カズエ

粗衣粗食それでも肥える家系なり

LLとLを試着してまだ迷い

一坪の庭に薬味の葱が伸び

日丸に一礼やおら席に着き

もやもやが解消してた立話

男の子にも宿題の縫いぐるみ

じいちゃんが居て自家製の風を揚げ

今治市 大本バット

場違いな所でわるい奴に会い

声だけは年を取らない久し振り

これが恋なのか仕事に身が入らず

ホステスの戸籍調べは下戸の役

肩たたき唄のリズムにのってくる

京都の晩秋(三句)

拝観料ここもか京はしんどおす

勅使門たくみの業を飽かず見る

足とめて百態地藏かぞえて見

馴れ初めも今では愚痴の十年目

ある筈のない金が出る衣裳展

いかめしい顔に似合わぬ医者ぎらい

言い訳の糧にされてるとも知らず

節電に仕事始めを欠伸する

子供が眠り人形ねむくなる

責任はとる上役が鼻毛抜く

本年もよろしく変身などできず

親子三人・初めてのお正月

三等分してめでたさを祝い合い

着飾った口から着飾った言葉

尼崎市 中谷利美

デモ隊のような晴着の群と会い
善人でいたくバイブル繰っている

柏原市 小谷葉子

渦中にも慣れて日記書きつづけ

欺される事もおぼえた花ごよみ

束の間も他人は演出おしまない

月夜の風はひとりの道にしてくれず

大阪市 堀口欣一

初風呂にめでたかりける肋骨

京のお茶漬千円札が飛び

余生をば飾るネクタイ派手にする

竹原市 三宅不朽

流木のどこにも澄んだ海がない

温室のなるほど冬の彩がない

ひょいと顔を見せて明日は二十才です

石川県 岡村与さく

終バスで見た教え子のつけまつ毛

なつメロを聴く妻の手の荒れを見る

下手くそなテレビ料理でもてなされ

岡山県 長尾保

まずお茶が飲みたい母の旅がえり

人間の姿勢に戻る酔いがさめ

野良犬の遠吠孤独かも知れず

大洲市 堀内暁風

学校で秀才社会では落伍

雪しんしん石油危機の寒いこと
夜が明けて見れば心配などおかし

宿毛市 瀬田美和

末席が金を使った芸を見せ

こま廻しパパが順番狂わせる

野良犬の石で追われた面構え

岡山県 谷川渥子

ぬかるみはぬけねばならずめがね拭く

人間を金の奴隷にして文化

アンコールなき人生に夫がいる

大阪市 稲本凡子

半生の歴史を秘める櫛の艶

同窓会借りた指輪が光りすぎ

振り切って帰れぬ孫の泣き寝入り

寝屋川市 江口 度

多数決しこり残した町内会

辞退をすればさいそくになる歳暮

いやな世相いっそ阿呆になってやる

今治市 伊藤一郎

冷え性の下戸が飲んでる養命酒

ギャンブルが夢とは男格が落ち

知事認可額に掲げて風呂値上げ

吹田市 吹田三郎

百人一首明治の声はよくとおり

美人ですプラスチックの鼻ながら

モ服着た日から放さぬ電算機

豊中市 安藤寿美子

水槽の鯉はターンを先ずおぼえ

離れからずっしり重いお年玉

頑固者又もチラシで鼻かむ気

愛媛県 小山悠泉

買溜めを憎み値上げを又憎み

花道も停年もない小商い

ひとときの安らぎ池の鯉を見る

羽咋市 三宅ろ亭

インフレの世へ露のとう負けていず

子沢山それでも養子の口を選び

建て前に間に合わぬのが下に立ち

新潟県 高野不二

王様がすぐ入れかわる物不足

元旦に届く賀状のそらぞらし

新婚を思い出させる物不足

和歌山市 津田与史

することがなくてそわそわ年の暮

お年玉貧乏で七四年おめでとう

好天続く正月婆と二人切り

守口市 野呂右近

初日の出合掌する人撮す人

夢を編む竹針止んだ終着駅

頼まぬに産んで呉れたで一揉めし

弘前市 小山内 貞 男
ミニの足想像されぬ晴れ姿
妙齡の背丈を親のせいにされ
長靴の匂いに暮し支えられ

八戸市 安 田 晴 己

各論は恰好つけてゴネてみる
世の中が皆バラ色の夜に酔い
酒やめてみればおせちも無駄ばかり

羽曳野市 麻 野 幽 立

日溜りを猫と分け合い福寿草
一輪の椿女の城に活け
買ひ溜めへ予算廻して寝正月

高槻市 山 田 スミ子

石油危機ケチは美德の世へ戻り
夢持って出た都会です苦勞
セールスも押しの一手の年の暮れ

大阪市 鈴 木 生 仏

民宿は地玉子だけを自慢する
節分に豆まく祖父の声高し
寅の尾を踏むよりこわい物価高

大阪市 内 藤 ますえ

ビタミン薬ただなんとなくなるとなく
くたびれて一番うまかったのが番茶
氏神さま古式ゆかしき拝観式

備前市 武 内 雅 堂

人妻の衿正しくてまぶしかりけり
病室の暗さへ派手な見舞客

今治市 渡 辺 伊津志

三味線の弦がゆるんだ新春が明け
今晚も愚痴聞かされる酒の伴

橿原市 西 本 保 夫

言い負けて黙々と読む学術書
ベテランで話のわかる平社員

大阪市 新 川 貞 祐

停年の沓下を脱ぐ誕生日
大阪に七十年地下で聞く出口

守口市 岸 本 豊平次

国旗でも出すしか用のない元旦
酒させば病氣の話聞かされる

寝屋川市 福 富 隆 子

年金の目は数の子もなめていた
商人と智恵競べする市場籠

貝塚市 行 天 千 代

母の味おせち料理を盛上げる
元日の耳へ姦まし救急車

仙台市 川 村 映 輝

ご飯炊いたこともないのに結婚し
色あせた写真の父母はすでに亡し

神戸市 佐々木 静 泉

誤字脱字教え子からの賀状くる

食べさせてくれる娘があり妻の留守

藤井寺市 古 結 百 水

秋婚礼の予定

家中の若ささらえて嫁く気の娘

ハネムンへまでは届かぬ過保護の手

島根県 槻 谷 一 葉

松と菊活けて心をとり返し

故郷はいいねとひたすら食うばかり

和歌山市 吉 野 富 子

来客に米寿の母の話好き

寝ころんで思案師走の隙間風

寝屋川市 井 上 武 松

品不足でも投売りの大みそか

可愛さは両手を上げて抱いた孫

大阪市 横 地 正 彰

日雇いの賑々しかった筈のあと

尺貫法捨ててコンマの家が建ち

今治市 今 井 松 花

雑沓に酔うて歩いた暮の街

タレントの趣味贅沢な黨を持ち

今治市 古 野 伶 人

タンスから喜怒哀楽を出して着る

たんまりと儲けた後を取締り

鳥取県 林 露 杖

孫去んで日課が減った広さかな

越年の風邪が馴染んだテレビ惚け

河内長野市 井 上 喜 醉

顔を売るところか顔へ泥を塗り

マイカーで行けぬ故郷遠くなり

出雲市 谷 口 あきら

御法話の坊さんやっぱり生だった

内職が上手になってふと淋し

岸和田市 池 田 香 珠 夫

買いだめに主婦の生甲斐ある如し

光るもの次ぎ次ぎ売って食いつなぎ

鳥取市 大 塚 豊 生

祖母の掌の温みそのままお年玉

愛の城築く野心の共稼ぎ

和歌山市 内 芝 としよ

赤茶けた手紙に故人生きて居る

土産物選ぶ苦勞も旅の味

新潟県 市 川 一 峯

ボーナス日帰りは引算待つて居る

老いの春欠礼の門を淋しがり

大阪市 神 夏 磯 道 子

洗濯と掃除が待っても旅樂し

平凡が重なる年を願う朝

鳥取市 勝 山 紫 宏

拾われた財布が空で届けられ

下積の疲れを妻の酌で埋め

大阪市 須浦つね

枯れる事知らない造花も色あせる

カルタ取り婆ちゃん読手に廻されて

大阪市 本間満津子

良い嫁と云うて独りで生活してる

見直される頃後継者が居なくなり

須賀川市 平栗金太郎

スタンドで手をすり合せ給油をし

新見市 吉田落猿

朝風呂で朗吟日課の第一歩

豊橋市 鎮浪翠月

天下り人事へ首をすげかえる

堺市 栗本藤持

叱られて泣き止むうちに年を越し

大阪市 小谷清女

父母の知恵入れて初孫賀状くれ

大阪市 平井露芳

店頭にないののが鳴るコマシヤル

泉佐野市 大工静子

賽銭を上げず福だと拾う人

今治市 真山国彦

東京へ電話掛けいと云う手紙

鳥取県 加藤茶人

消費者をおだてすかしてまた儲け

東京都 朝倉義子

かしましいかたまりつづく下校の子

鳥取県 大坪天涯

苦しさを聞いて聞かせて酌み交し

鳥取県 安履翁陽山

スピーチの本でどうやら座をにこし

出雲市 藤井晴月

慣れに生き慣れの怖さも七回忌

兵庫県 高橋近江

老人大学落第したい者の内

島根県 岩田三和

モナリザが外交官の顔になり

島根県 穴戸千草

若い気でいつも鏡へ古稀の皺

米子市 江原良二

かるた等古い古いとボウリング

鳥取県 福田保子

四季の花隣の庭に咲きはこり

大阪市 花田繁子

正月を逃避の組と成りにけり

大阪市 村島秀村

門松や松竹梅も絵でかざり

赤穂市 谷口赤童

寅年頭とろけた雑煮嫁に乞い

堺市 檀野茂子

見くびった相手の強さに蹴落とされ

「水煙抄」の

選を終って

北川 春 巢

「水煙抄」の一年間にわたる選がいよいよ終った。選後感に、何か一言なかるべからず、と思つていた矢先きに、編集部からも感想を述べよといつて来た。

先ず体裁からいおう。この欄はこれまで、「近作柳樽」というタイトルだったのが、昨年一月号から「水煙抄」というタイトルになり、それも活字のタイトルだったのが、二月号からは久米奈良子さん（本社同人）の麗筆に交つて、現在のように大へん体裁のよいものになった。私の選が発表になりはじめてのは四月号からだつたが、それまでに立派な外觀が整つていたとすることができる。奈良子さんに対しては、心からお礼を申し上げます。

次は内容である。この一年間、おつきあい下さった投句者に対してお礼を申し上げると共に、選者の特権とはいえ、ご自信のあったであろう句を多数、没にしてしまったことをお詫び申し上げたい。

昨年の四月号に、それまで選者であつた菊

沢小松園氏が、やはり選者交替の弁を書いておられる。小松園氏は「水煙抄」の句は、同人投句欄の「川柳塔」と違って、玉石混淆である、と指摘しておられる。投句者の柳歴もまちまちだし、そのことは私も同感である。これを私なりのことばでいえば、中学生、高校生、大学生、いや大学卒業後の大学院生に相当する句が交っている、といい変えられる。

幼稚園や小学生位いの句は、初歩教室で本田恵二郎氏が指導しておられる。川柳には卒業はない、一生が勉強なのだから、どこへ投句されようと勝手だが、初歩教室の人は「水煙抄」へ進級して頂きたいと思う。もちろん初歩教室にだつて中学、高校、大学位いの句も相当に見られる。しかし、初歩教室は題詠吟であり、恵二郎氏の明解な選評や添削があり、恵二郎氏の指導の成果なのであるから、OBとしてここへ投句されるのも誠に結構なことである。

ここで私のもうひとついいたいのは「水煙抄」から卒業して頂きたいことである。「卒業する」とは、同人になつて「川柳塔」欄への投句へと進むことを私はいつているのだ。同人になつたが、個人的には色々の事情もあつて、躊躇（ちゅうちよ）される方もあろうが、そうでなくて同人になるチャンスは掴めぬ方もあるうし、同人の規約をご存知ない方もあるであらう。自分の句は「川柳塔」欄の句と何ら遜（そん）色はない、と思つておられる方も多いであらうし、事実遜色のない

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般

合資会社 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 三四五二一 四
夜間 06 四四〇 八

句も多いのである。いつまでも「水煙抄」の常連であるよりは、一歩駒を進めてもらいたい、と思ふのである。

以前にも書いたことがあるが、生物学には「個体発生は系統発生を繰り返す」というセオリーがある。人類が何億年もかけて成し遂げた進化を、十月（とつき）十日の母胎内で繰り返す、というのである。胎児の一時期にはエラがあつたり、尻尾が現われたりしている。川柳も同じことである、と私は思っている。川柳の初心者からベテランになるまでに、考えることは、大体同じ道をたどっている。ただし、その期間が長いか短いかは、個人の素質や勉強ぶりによって違ってくる。学校教育の六・三・三・四制通りの年限で川柳が上達するとは限らない。中学生段階の人に、高校生レベルの選を選者がすれば、没句が多くなり、大学クラスの人に高校生レベルの

選をすれば、入選句が多くなる。作者の年令には関係はないのである。その作者が、どの段階にある人であるか、を見きわめることが選者には大切なことである。選者としては、全没にすることも、十句とも入選させることも、そのレベルをどこに置くかによって可能なのである。が、そのどちらをもしたくないのが、選者の本心であろう。そういう意味で、選することは勉強にはなるのだが「水煙抄」で小学生、中学生の句ばかり見ていることは楽しいことではない。また大学院クラスの句を見るのはもったいない気がする。

大学院クラスの人々の名差しをすることも可能ではあるが、ともかく川維時代不朽洞会員であって、路郎先生の選句を私と並んで受けた人さえ交っている。また長い間の欄に

雅号ぶっちゃけばなし (120)

たけと



板尾 岳人

いたお

金剛山は美しい、大阪府下最高一一二五米。近鉄南大阪線富田林駅より始発七時二分、登山口行金剛バスにて終点約三〇分。登山口より真すぐに道乗り二八〇〇米、一時間三〇分で山頂葛木神社に着く。桜、ブナのしげる樹間より見る青空は最大の気分である。一月現在登山回数二四五回、一度一緒に登って見ませんか。

「川維」時代は「凡吉」という号でしたが「岳人」(たけと)と改号したほど山好きなんです。―岳人の歩跡を辿る雪の山―百酒。―本宅は金剛山というお人小松園。―山男山の画集に汗おとす―薫風。

みなさんほくほくの山好きはご存じです。

―金剛山へどうぞ。

(酒卸業・経理課)

姿の正しさを見直し

―昔思う乏しさの中で―

最近の俳句・

川柳誌から

朝日新聞・49・1・17付

―前略。最近の俳誌、川柳誌にも、論壇、作品ともども、一段と姿の正しさを見直そうとする傾向のうかがえることは何よりも喜ばしい。―後略。

「川柳塔」(十二月号・大阪市)の四十八年度秀句抄は、川柳があるいは俳句の領域を犯しているのではないかと思うほど、姿正しく格調の高くなっていることを示している。

例えは

「揚っても揚っても雲雀に空がある―小浜牧人」

「落ち着かぬ心へ香を焚いてみる―本田恵二朗」

「ゆっくりと廻りたい日もある地球―川上太輪」

「うたたかのごとくOL来たり去り―仲どんたく」

「真白く干して女は満ち足れり―小野克枝」

「鬼の面かぶって鬼になる強さ―香川酔々」など、人生過去への反省と未来への精進に教ええられるところが多い。(後藤 比奈夫)

川柳 中山道六十九次 (13) 富士野鞍馬

62

ばん
番場

醒井から三十町 (三・三キロ) 此宿は山家なれば農家或は樵夫ありて、旅舎も簾なり。駅中、蓮華寺、北条仲時并に一族自害せし古跡也として挿絵にある。

朝妻の里。筑摩の北に隣る。むかしは此地湊にして、繁昌の所と見えたり、むかしの江口、神崎の如くならんか、遊君など有しにや。世に朝妻船の図ありて、遊女ゑぼし装束にて舞遊ぶ休見ゆ。と図会にあり、

七つ迄浅妻船は捨小船

(武七32)

浅妻に似たが三十二文なり 交調(二九六)

―これは江戸の舟比丘尼

柳ばし浅妻の図で他所出の子

竹子(七三13)

といずれも古図に則って川柳によまれ、この朝妻船の絵を、英一蝶が描いたのを、將軍綱吉の寵妾お伝の方を諷したといふので、元禄六年(一六九三)三宅島へ流された。

朝妻の粗相一蝶船に乗り 集馬(一一12)
一蝶が落度我が身も舟に乗り

(乙二四八19)

鳥便り哀れ名画の蝶一ツ 山桜(五一37)

―後十二年目に江戸へ帰った。

長浜。朝妻の北一里ばかり、此辺都會の所にして商人多し。此地の名産は、糸縮緬、紬、釣柿、其外種々あり。凡五十町許にして、賑ひ他境に勝れたり。元此地は豊臣秀吉公はじめて御在城なり。これより播磨の姫路へ赴き給ふ。とあり、秀吉が長浜城主となつたのは永禄十二年(一五六九)で三十四才、まだ藤吉郎であつた。天正三年(一五七三)に羽柴秀吉となつたのである。

藤吉が智恵十兵衛をお先きにし

實子(二〇九45)

―十兵衛は光秀

城ふしん手はづをくばる猿眼コ

カテウ(四八11)

―洲の股の一夜城で功名

羽根と柴貫つて武勇世に秀で

(安六満1)

―それから羽柴秀吉となる、丹羽、柴田

の一字をもらつて
名産の縮緬は今に弘く売れている。

ちりめんはとらまへいと禿いひ

縮緬に松のやうと追人いひ (二〇42)

六尺に切れば氣のあるちりめん 五葉(五4)

緋縮緬すこしは風も吹せし 斗丸(三九11)

ひぢりめんひものないのが本 事 (拾八13)

物さしで足らぬちりめん打たたき

筑摩明神。筑摩村の南、祭神市杵島姫命、其神の御誓ひにて、女の男したる数に随つて、鍋を作て、その祭の日たてまつるなり。

男あまたしたる人は見ぐるしかりて、少し率りなどしつれば、物あしくてやみなどしておしければ、数のごとくしていのれば、なをりなどとするなり。とあり、四月一日が祭礼で、男をもつた数だけ鍋をかふつて、神輿に随行参詣するといふ珍らしい神事で、絵にも描かれて伝えられてゐるので、川柳にも多く

詠まれ、

手にさげるよりもせつない鍋祭

松山(三八九)

顔に火をたいて祭のなべの数

(三〇九)

鍋かむる祭も人がにへこばれ

佃(七二八)

摺子木をさすべきはずを鍋かぶり

雨間(二二五)

祭礼にまことあらはず鍋一つ

(拾四七)

なべ一ツ貞女がかむる神事也

玉章(三九三)

鍋二つかぶるかはりに通りもの

(拾五十四)

鍋祭り内をかぶったわけもしれ

玉夷(八七三)

摺子木の数鍋でしる御祭礼

風松(七三九)

鍋のかづ親の顔まで墨をぬり

ヒツメ(九一)

不工面な筑摩まつりは土なべなり

赤奴(七三二)

筑摩祭は重ね着が恥しに成

松丸(一四七)

磨針(すりはり)峠。挿絵にあり。此嶺の

茶店より見下ろせば、眼下に磯崎、筑摩の

祠、朝妻の里、長浜、はるか向ふを見れば、

竹生島、沖の島、多景島、北には小谷、志津

嶽鮮かに遮りて、湖水洋々たる中にゆきかふ

船見えて、風色も美観なり。とあり、

琵琶湖は周囲二四〇キロ、面積六七四平方

キロ、わが国第一の太湖である。孝靈五年

(前二八六)一夜のうちに富士山が突出し
て、この琵琶湖がへつこんだという伝説。
くばい所へ水たまる孝靈五

本如(九〇五)

ぬけがらも三国一の水たまり

春駒(三五六)

近江では田地へ琵琶の糸を引き

桑虫(四二二)

ひえおろしびわのてうしをくるわせる

(明三松六)

湖中の竹生島(ちくぶ)は、廻り二・三キ

ロ、舟をもつてめぐれば四キロ、水底の深さ

南北一四五m東一三五m西二〇〇m、東の岩

下の岸に西へ通る穴あり、水通うて流る。穴

の中に熱気あり。長浜より六里(二三・五キ

ロ)観音堂は西国巡礼三十番の札所である。

夜が明けたばかりで残る竹生島

藤後(五一五)

順礼のあへ物になるちくぶしま

(明三松六)

打波に楽の音もする竹生島

しらふ(四六二)

御詠歌を琵琶に合せる竹生島

佃(七八三)

八景の外におまけは竹生島

鼎亭(二四六)

象の寝た風情に雪の竹生島

(二四六)

御詠歌は「月も日もなみまにうかぶ竹生島

船に宝をつむ心地して」寺の名は宝蔵寺。

番場より一里六町(四・六キロ)
むかしの多賀の社の鳥居が此駅にあったの
で名づくる。今はなし。彦根まで一里、八幡
へ六里。此駅の名物神教丸、俗に鳥居本赤玉
ともいふ。此店多し。挿絵にそれがある。
彦根山。犬上郡にあり、慶長六年井伊家領
し給ふ。諸士名家凡七百軒許、城下の町八十
町とあり、城は現存してある。
荒し志賀に昔ながらの掃部様

63 鳥居本

井伊掃部頭

鮎は本店鮎は出見世なり 赤菜(四二六)

鮎は近江、鮎は見附内江戸屋敷 門柳(三三八)

挾箱片々琵琶の側に置 はさみ箱一つで彦根おつふさぎ (明八松一)

二つとはない先箱の御家柄 ヤマキ(八一五)

他家たぐひなし箱一ツ鍵一本 喜柳(一三四)

井伊家の片道具、一本一箱 三十五万石井伊掃部頭直弼は、安政五年

(一八五八)大老となり、安政の大獄を起し

て、反対党を幽閉、殺戮した等の恨みによ

り、万延元年(一八六〇)桜田門外で、水戸

藩士十七人に、登城の場所を殺された。そ

の時四十六才であった。

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

浜田久米雄

虎の子の値打ちが小猫ほどになり

本田 恵二朗

値上りと物不足の話は昨年から聞き飽きて来た。寄ればその話ばかり、えらい時代に生きてゆかねばならぬ。昔は虎の子のように大事に大事にしていた一円、五円、十円、百円札であったが今は無雑作にポケットにねじこまれるのである。ぼくの旧作に「催促へ小さく折った五円札」というのがあるが今の人にはピンと来ないであろう。虎の子が猫の子以上に小さくなってしまったから。

花咲いてとなりへものが言い易し

本多 柳 志

日本はよいところ。四季折々の花が咲く。その花をばさんで隣人同士の瞳が合うのだからうれしい。どちらからともなく話しかける言葉はまず花のことからだ。平素あまり話すことのない隣人の心はきれいに咲いた花をき

っかけに口がほころびるのである。

人間の特技笑顔が作れます

小野 克 枝

犬が笑ったり猫やにわとりが笑ったりはしないが人間はすぐに笑顔になれるのだからこれは人間の特技かもしれない。鹿爪らしい顔をしていても人に会うと相手によってすぐ笑顔に変えられるのだから第三者が見ていると不思議に思われる。かくして人間は笑顔を作ったり消したりして日々を歩みつつけるのである。

宴たけなわけ引きつきまとい

天 正 千 梢

酒の座となると飲み食いするだけでなく平素からの念願の一端でも果して来ようとする心が入り乱れるのであるから全く社交場である。酔えば思うことがどしどし言えるからありがた。お流れをいただきますと上司の前に座ればただただで引き下るわけにはゆかない。もろもろの事が口をついて出る。その他いろいろなかけひきがあちらこちらで始まっている。宴は正にたけなわである。

この音も匂いもみんな値上げされ

堀 江 正 朗

世は値上げ時代の時事吟である。食卓を取り巻くもろもろの音と匂いに値上げのすさまじさがうかがわれる。値上げの話は聞き飽きてもう語る気力もないが黙々と暮す人の頭の

奥にやはり刺身ひと切れ、豆腐ひと切れの値段がこびりついている。

老婆がのんびりちり紙買いそびれ

竹 中 肖 二

悠長な老夫婦の生活に一種のほほ笑みがうかがわれるのであるが現実には実に厳しいものだ。ニュースや新聞を上の方で聞いている間にちり紙はどんどん買い占められていた。誰かにちり紙がないと聞かされた時にはそこの店を探してもほんとうに無くなっていった。ちり紙ぐらいがと高をくくっていた油断が老夫婦を唾然とさせたのである。

子が生れその子が生れ消えるのみ

大 路 美 幸

あたり前のことではあるが若い人にはピンと来ず年が寄るとピンと来る句だ。消えてゆくのは自分である。ひと年とすると一年ごとにこんな事を考える。盛者必滅会者定離とは全くうまい表現だが、この言葉にふれると淋しい。

色彩画入り

古方手書き句集

送料共 八〇〇円

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

正本水客

再会のまあまあのと女笑む

三宅 不朽

久振りに再会して、しかも相手に引け目を感じることのない女性の表情が滲んでいる。まあまあとか、どうもとかいうのは便利で含みのある言葉である。

店仕舞してるでもないビリヤード

山根 白星

若い女の子が節をつけて点数を採っていた昔の華やかさはないが、静かに潜行した愛好者は今でも少なくないようである。たまたま街で見かけるビリヤードのひっそりした様子を、この句はうまく捕えている。

個人差があるとはうまい言い逃れ

中谷 利美

大臣方の議会答弁を聞いているような気がする。

ピカソにもキリストにも遇う銀座

堀口 欣一

正統的なピュリタンでも、前衛的な先鋭

分子でも平気で呑み込んで身じろぎもしない古くて新しい街、銀座。銀座とはまことに不思議な存在である。

老けたなと思う列車の窓ガラス

堀口 欣一

夜行列車の窓にふと映る自分の顔に、越し方、行く末の思いが外の明りと共に流れて行く。独り旅でもあれば感懐はひとしおであろう。

爪染めて男に捨てられそうにいる

江口 度

爪を染めているのは別に珍らしいことではないが、不安定な心理状態が何となく出ていて捨てがたい。

閑人はどいてどいてと十二月

安藤 寿美子

いかにも和やかな家庭の雰囲気と、師走の気分がユーモラスに入り混っっている。ひと休みしたらライバル見失い

川上 富子

現代版うさぎとかめの物語。

手みやげもなく立寄って持てなされ

堀内 曉風

ふと思いついて寄って見たら、大変喜んでくれて意外な御馳走になったというような経験は、誰にも一度くらいは有るものである。バツの悪い表情が眼に見えるよう。

しんがりの来るの待ってる床柱

川村 映輝

S君がまだだから、もうすこし待ってやろうと大物の風格を何となく誇示しているよう

にも思える。

嫁がせて菊へ付つ日の多くなり

瀬田 美知

菊へ付つ日のの中七に、娘を嫁にやった親の安堵感と淋しさが籠められていて心うたれる。この場合の親は男親であると思う。

いつまで他人で非売品の造花

小谷 葉子

女の痛烈な恨みが感じられるが、上八の説明調がちよっと気になる。

老いの旅方向音痴の妻連れて

池田 香珠夫

仲の良い旅の年寄り夫婦を見ているのは楽しいものである。方向音痴の妻とは、いかにもありそうな事で微笑ましい。

思ひ出を温めに行く一人旅

稲本 凡子

新しい発見でも表現でもないが、何か捨てがたい暖かさがある。

野本昭四著

句集「白い闇」

定価 二〇〇円

序—清水美江。序にかえて—田中空壺、跋—佐藤正敏。紙不足をふっとばす見事な句集である。

—半盲の小銭を探す影となる。作句歴五十年近いキャリアは各ページに光る。

発行所 〒336 浦和市常盤九一四一六

埼玉川柳社事務局

▽同人特集△

女流作家

フェスティバル

(到着順)

同人の女性作家60氏総参加をねが
っていました。が、原稿締切日まで
に14氏が未着でした。しかし、46
の花が春にさががけ、ここに見事
な花園を作ってくれました。

岸和田市 高橋操子

すきやきの位置かえさせたボタン雪
買いだめの列へこな雪降ってくる
いましめのむちとさとう品不足
品不足草たべた身はたじろがず
(高野山にて)
お坊さま昌子の詩へ立ち止まり

岸和田市 神藤歌子

投げかえす雪は炎の球となり
小説の海はきれいに澄んでいる
ピンボケの家族同士のおつきあい
憤りかくし切れないピアノの音
親子三代ひな人形にある家風

岸和田市 林裕子

グリーン車の隣はつめた金メカネ
丈直す指にひかかる絹の布
居眠りをしてる間にすむメロドラマ
手の荒れも気にしておれぬ十二月
どん底で女自力を見せはじめ

岸和田市 雪本珠子

日かげ者蛇の目の傘がよく似合い
燃えつきて夏の夜空に散った恋
キャンパスにすべての過去をぬりつぶし
何もかもないないづくし年の暮れ
なんとなく厄を氣にする年になり

岸和田市 山田智子

赤ん坊との対話はからだごと
反省の時を与えず子を叱り
夕映えはにぎりし海を化粧する
一言をひかえて他人とうまくゆき
日記帳焚火の中で赤くもえ

氷見市 関美子

ワンボタン違えたまんまそのまんま
妻で寝て母で目覚めるくり返し
多幸症わたくしだけのT定規
耳閉させ風は言葉を作るから
忘れろとわたしの好きな合歓が咲き

島根県 堀江芳子

ほんわかほんわか夫と喜劇の幕があく
寒厳し病む身病む子のかゆ炊けは
子ら想う寝返り夜が動かない
目で合図出来ぬ夫のもどかしく
雑念を寄せぬ茶筌といてまるい

貝塚市 野坂つき子

俄雨レモンの恋が生れかけ
気の強い姉の涙を見てしま
ピエロにもなろう貴方が望むなら
酔醒す散歩ヘゲタがついてくる
たまに逢う恋は指先まで喋り

大阪市 津守柳信

望みごと叶うみくじにはげまれ
泣き寝入りしてはおれない世の動き
忙がしく生きる人生も一度きり
まぼろしの母は何時でも若く居り
さまざまの虎を眺めた年賀状

西宮市 藤村 女

手を握り返して女謎をかけ
ふり返る女の肩に嘘があり
銭湯に貧富の差なく湯が溢ふれ
鐘の音に花散りそうなお堀端
満ち足りた心花にも唄があり

大阪市 山川阿茶

方門に従う水の大あはれ
飲みたがる男着たがる女 秋
ダイヤになれぬからダイヤで身をかざり
サンキューじゃ礼を云われた氣になれず
無と空をどう教えようコンピューター

大阪市 天正千梢

そのみじめさ言いわけ多すぎる
能力へ物差し使いすぎ
おそろしい事の一つにお金持ち
途方もない野心酒と共にさめ
氣休めの自問自答で今日閉じる

東大阪市 宮西弥生

海岸へ天女降りる松がない
そのひとと旅する羽は別にもち
捧げては女ごころの揺れやまず
邪魔になる母の餅を聞く安堵
日本の鼓動に合わせ松生さる

大阪市 西出一栄

太閤國にて
金婚を祝われて功無きを恥ず
胡瓜と茄子どっさり漬けて心満つ
すすきの穂こよみ通りに顔を出し
やわらかな陽射しへおしめ解いてやり
添わしても根じめの花はあっち向き

米子市 八木千代

その日雨あとは心に書く日記
虹を見た日から変えない散歩道
久々の素足へ女たかぶって
再会のひとりいくさの影と来る
打ち明けてくれた十字架ともに負い

富田林市 岩田美代

ゆっくりりとはせ止めている迷い
現実を見る目は片方だけにする
美しい嘘でらてらと柿をむく
ふり上げた蟹のはさみはまだ青し
空虚感南京豆はかんの底

大阪市 小林トメ子

負け将棋負けてくれたと礼言われ
銀狐お稲荷さんへ初詣
物不足指定座席も色紙当て
寅の年七回迎え仲人し
ガスメーターカチンカチン銭の音

東大阪市 竹中綾女

ブーメランそんな夫にあきたらず
バスガイド帰路は無口になつて座し
つい足が花屋へ向う嬉しい日
紫蘇の香のただよう厨妻の幸
いつの間か祭の鉦に足が合い

富田林市 木村弥栄子

見破られそうで仮面のむずがゆき
人妻がほどよい距離で匂わせる
抱いている秘密に女みたされる
三角の底で女は行詰り
合掌の心の視野の美しき

堺市 高橋千万子

控え目の女も乳房はつてくる
とは云えど絆を切る刀なく
うなずいただけで男は事がすみ
きつかけの言葉へうそが走り出る
つまずいた石と対話で起き上る

島根県 柳原秀子

花冷えに足袋の白さが痛いほど
空白のほしさが草をむしらせる
脚洗う波は確かなゆきかえり
こおろきが飛び込む小さい秋つれて
四季のない花屋で冬の花を買う

米子市 石垣花子

日曜日ごろごろ出来る物不足
乳の出ぬ乳房豊かに盛り上り
老眼鏡探すひたいで黙ったり
趣味と云う潤滑油ありまだ燃える
還暦へ大波小波なつかしみ

香川県 三井 醉夢

糸をはく蜘蛛よ私は火を吐かん
愛欲の行く末みたり緋の牡丹
銭のこと言うこの恋ももう下火
恋をした勲章一つ深海魚
炎の輪くぐり抜ければ凡婦かな

大阪市 中島 小石

後へひけぬ男の意地のあわれとも
般若湯老師俗人ともに酔い
女 女の正体知りたがり
尼僧一人 紅葉の寺のただすまい
つまずきへ心のしみの消し切れず

倉敷市 小野 克枝

天職のこれしか無くて父の歌
情もろい女が苦い茶を入れる
足り過ぎてびっこ曳きたいのか吾が子
真白く干して女は満ち足れり
なめくじの足跡を拭くこれも平和

大阪市 太田 良子

不信感抱けば病氣も足踏し
病人の神経にふれまいとする微笑
再入院医者だけが知る退院日
笑わせて患者を手術台に上げ
聴診器置けばやさしい父になり

富田林市 藤岡 花梢

現実にもどればひとり風の音
運のない実印長男譲りうけ
その次の言葉が出ない星にじむ
シャボテンの棘にも心ささる悔い
一票を半分ずつにしたい義理

島根県 大森 孝華

ふり返る足跡に満つ夫婦なる
冬の旅心にひとそ宿る影
わが土と思えばいとし簪の目
ほほ笑みに溶けて涙となる振り
限りある旅路の果ての道標

堺市 伏見 茂美

憧れも夢もあんなに摘みとられ
より添うて見たが燃えない疲れしる
中年すぎ紫にみれぬまだ残り
イニシャル胸に秘めたく過去の人も
もれているらしい近所の風あたり

大阪市 宮尾 あいき

女とは悲しきものよはらみ猫
岬廻ればもう故里の浪の音
病む夫に気兼ねながらうす化粧
木枯よ吾が子の墓標をよけて吹け
孤独からやつとのがれた金魚の死

大阪市 小出 智子

紫を着るには心貧しすぎ
アルバムの遠い青春笑っている
心境の変化がペンを軽くする
灯火親しむ母の机と子の机
末っ子三人の旅
ふたりで眠るこの子を生みし日のように

大阪市 河野 君子

起き抜けの朝の夫婦に嘘がない
イミテーション今日の身飾るにふさわしく
こんな時救われる夫の無関心
迷わずに散りたく紅葉燃えている
闇の中で数珠を握っている安堵

大阪市 柳原 静香

残り香を惜しむ着物のこむらさき
疑うて信じて夫婦の歴史なる
愛不信心の刺が抜けきれず
贅沢の原点母と娘の違い
傷心を打ち消す今朝の髪を結う

鳥取県 川崎 秋女

店継がぬ子をあきらめて店守る
商人の目にせいたくなストにくむ
さて何を着よう五十の春の色
黄色の似合う孫なり黄を編む
急ぐ日のシグナルが赤 赤と出る

東大阪市 久米 奈良子

発心の硯を洗う春の水
白珠を濁りにそめず抱きつづけ
迷いきし鳩の瞳はわが愁い
夜の河透かせばやはり流れてた
さからえば母の白髪が目立つなり

岡山市 川端 柳子

虫の声更ける歌とも話とも
砂山を登る徒党の蟻として
穂はまだはずみつつけて遠い道
祈られて曇空から差すうす日
子に残す足跡だから心こめ

大東市 土岐 トク子

五人目にやつとあげたぞ鯉職
病める身にどく真赤なカーネーション
「大将戦ですよ」と遺影高く抱き
万歳とさげば母さんありがとう
子の幸はわが幸さびしくかみしめる

米子市 林 瑞枝

背伸びしてその足元をすくわれる
両親の愛お返しも無くて老い
恋う程の甘き傷口には触れず
パラソルに女の自由がある日照り
外づらの良い苦虫の背を流す

大阪市 黒田 真砂

明日の夢心の画布に染めてみる
心の糸縫れて解けて銀婚式
ナフタリンつけて出したい子の育ち
自己嫌悪心の甘き曝け出し
俤が飛んで来そうな初春の窓

島根県 榎 みどり

朝を出るフリコの如き夫送る
輪の外でバックボーンを持ち続け
原点にふれてわびしく子守唄
あやつりの糸をそおつとはなして見
手のひらをかえす心のみだれ髪

大阪市 藤田 頂留子

集印帳飛び番で行く札所
払ったらくモ倍ほどの果でかまえ
赤旗もなくただもくもくと蟻の列
メーカーと一字違いの特価品
串を手にギャンブル情報ひとくさり

岡山県 嘉数 千代香

向うばかり見える目標でけつまずき
二ニが四の夫で出世に遠くおり
おちてなお椿 おんなの彩が炎え
七味たつぷりかけて人間不信の日
亡母点となりて心の海に付つ

富田林市 和田 維久子

詠えたように二人目男なり
羽ばたけば自由な羽も重くなり
一線を意識しながら酔った振り
初恋はまだ去りやまず雲を追う
ミシン静か幻追っている女囚

和歌山市 垂井 千寿子

ネクタイが若過ぎるとは妻云わず
天罰を分け合う人が居る安堵
母の袂を持っているという安堵
ご先祖も暑かる仏壇開け放つ
夫の魚死
加害者が泣く私は涙を置き忘れ

大東市 吉川 米子

吹きだまりさけてしぶとう生きのこり
二十八年まだ続いていた人の列
ひとり住まい男出入りに気をつかい
多情多恨みなき出した阿波おどり
お茶代はわりかん零円気は九どり

岡山市 光好 陽子

社会事業に捧げた女史の白い髪
三角が見事な母のにぎりめし
正札をみてあきらめた顔になり
あさってと言う重宝な逃げを持ち
塩だけは切らさぬ母の台所

怒れ！川柳

朝刊に、夕刊に、

物価高にあえぐ母、二児道連れに心中。

——材料不足に〇〇店主自殺。

そのほか、夫に保険をかけ、妻が愛人と共謀して殺したり、わが子に保険をかけて実父が車で轢き殺ろすなど、正に、

絞れば血潮したたりそうな社会面 柳志である。この句、表現がドギツイという人もいたが、このような世相のなかにあって、これくらいの川柳が出てきてても不思議でもない。

家庭日記（石原青竜刀先生の受け売り）だが川柳ではないとおもう。いわんやこの異常日本においておやだ。

自句を弁解するようで書きづらいが、多くの句もドギツイ部に属するのだそうだ。多くの句がきらいで性格も違うから、本社句会では多くの句を抜かない、というようなことを正直に云ってくれた人がある。そのきらわれる原因がドギツイのかどうかは知らないが、

不二田一三夫

何かを訴え、何かを求めようとすれば、やっぱり強い言葉が出てくる。性格までは妥協できないので、この選者にはお互いのムダを省く意味から句を出さないことにしている。

路郎先生は、選者が披露まえに「何百句のうちから何十句、私の好きな句をいただきます」という人には、かならず「好きな句よりも良い句をとるように」と警告されたものである。

さて、

揉み手して待たされて買う十二月 寛

王様であった「消費者」の、これはまたなんという哀れな変りようであろう。この句の裏には怒りが秘められ、武器を持たぬ川柳人が句を武器にして銃口を向ける。当然のことである。

チリ紙の話題に地球混乱し

克枝

作者は買い手ではなく、洗剤などの売り手である。どっと押し寄せる買い溜め族には、前句とは反対の怒りがあったことであろう。

トイレ紙をかう行列とは呆れ 形水
「バカ気た話だ」と、吐き出すような怒りがそこに見える。

買い溜めて置き場に困る紙の嵩 伊三郎

「お前、やり手だな」

と、ほめちぎった亭主族もいたとか。しかし、この作者は

「お前はアホか」と怒っているのだ。

物価高組板やけに聞えて来 一峯

政治不信のうっぶんが庖丁の先きで怒りの音を立てている。

値上がりを云うな晩酌まずくなる 珠笑

愛妻だけに怒っているのではない。

借金 一杯やるや君 紫香

言葉はやわらかいが、やけ気味である。どうともなれ、と、そこにも怒りがみえる。

貧乏は何でも両手でつかむくせ 十止庵

無名時代の吉川英治（雉子郎）の川柳を思い出させるような佳句である。貧乏にかけては熟練工のばく、痛いほどの句のよさがわかる。この句、怒りとは関係がないが、どう

亡母ミ、ネ七回忌志

金一封

和田維久子

本誌発展費としてご寄贈。

してもここへ書きたかったのだ。

どこをどう押えてみてもだまし舟 拙作

折り紙のだまし舟のように、どこをどう押えてみても帆がつかめない。国民を盲目にしておいて、戦時中も平和時もだまし通してきたのが政治というバケモノだ。

なまけなく野党が見える物価高 章雅

「なまけなく」は「腰抜けめ」に通ずるようである。

8月号から11月号までの四か月間に物価高の句は十句ほどよりなかったが、12月号、1月号ともなるとガゼン火を噴いた。

石油危機は「原爆」以来のうろたえかたを見せてくれた。

工藤甲吉氏から

(2・2)

前略——思わぬ逆縁の死別に凡人のかなしさすっかり戸惑っています。しかし仏事も相済み、さみしい中にもいやな一月が過ぎて、わずかばかりホッとしました。

川柳塔二月号目次下原稿に、子規、剣花坊とも日本新聞社員であったことを書き落したことに投函後気づき、書き加えてもらうつもりも病人をかかえてそのままになっ

てしまいました。
青森は記録的な大雪でそれがさらに憂うつにさせます。

(不)

「ざまあ見る」と叫んだのは神の声か。

モノ不足ゴミ戦争も片付かず 英好
寝たきりの老人へもインフレ容赦せず

春果

もともと川柳人は生活が安定していられたから、迫真の句がすくないのはあたりまえだが、多少の美意識には欠けても、たまには怒りの句をたたきつけてやりたい。

石油

氣候までアラブ側という寒波
正確に来る冬 それに石油危機
原点に戻れと石油牙をむき

不安

狂いそう目が覚めるたび値が上がり
積木崩すようにニュースの昨日今日
この音も匂いもみんな値上げされ
流言を怒りながらも沿う暮らし
二十八年まだ続いてた人の列
結局は値上げの幅で決となり
信仰をしても物価は下げられず

昔にかえる

ネオンからローソクになる国あわれ
戦争を知っているから買い溜める

贈答

騰った分 嵩で埋めとく贈りもの
お年玉 子も赤旗を振りたそう
蛇足ながら拙句をもう一句。

北まくらさせた姿の日本地図

頂留子 旭童 白汀 醉夢 右近 正朗 君子 米子 三十四 露芳 弘生 甲吉 瓢太 吞歩

★

川柳塔社常任理事会(2月4日)

本年は「川柳雑誌」改題「川柳塔」の創立十周年記念になるので、記念川柳大会は10月6日の二賞発表句会(同人総会後)に開催の予定だったが、7月7日の路郎忌(同人句集刊行記念)に、句集刊行記念と創立十周年記念川柳大会を一举に開催とさまる。

川柳大会委員長に橘高薫風氏をわずらわせることに満場一致。やや宣伝が立ちおくれのため大会委員は急に忙しくなる。

句集のほうは印刷用紙も確保でき、スタッフ代表の西尾榮氏もホッとひと息ということ。同人諸氏の好調のすべり出しにこたえ、スタッフ一同大ハッキリである「川柳雑誌」の同人句集「私達」につづけが合い言葉である。

句は旧作、新作を問わず自選となっているが、同人どうして検討しあうことも一策であろう。締切が3月末日なので早目にご送稿のほどを。

若本多久志氏の満々のファイト、菊沢小松園氏の「閉会の辞」返上など、活気みなぎる理事会だった。

出席―野村太茂津・若本多久志・中島生々庵・本多柳志・正本水客・西いわを・菊沢小松園・橘高薫風・西尾榮・不田一三夫諸氏

放送

堀江正朗選

放送が釘づけにする熱戦譜 代仕男
 放送の生々庵師の声若し 綾女
 放送が済むころ受験子眠くなり 洋々
 放送の鬼収録にたじろかず 白水
 最高の場所を放送席が取り 一風
 生放送タレントの声手に握る 祥月
 アクビまで写してくれるナマ放送 かつみ
 放送が月の伝説打ち壊し 一子
 スタジオで方言捨てて固くなり 芳子
 生放送潮の香りが匂いそう カズエ
 オリピック日本中を釘づける 翁童
 放送が山まで届く村祭 伊津志
 テレビドラマも強盗のヒントを得 七面山
 有線放送畑の母を呼び戻し バット
 ソウルもきれる日本語のニュース 宵明
 空からの宣伝街を掃いていき 紫宏
 すぐ帰れ名指しで有線呼んでい 軒太楼
 加害者の名は呼び捨てで放送し 伶人
 アノラック着て震えてる放送車 松花
 地球の裏より時間を超えて来た放送 度
 放送が狂う歯車また廻す 凡九郎
 放送が指名手配に知恵を貸し 春日
 おもむろにゼスチャーほどマイク 千翁

緑

川端柳子選

放送局が来た来た政治に話題かえ 度
 放送嬢その声だけに惚れておき 弘生
 放送の本番拍手から入れる 宵明
 ソリの鈴テレビが雪を訪ねてき 三十四
 中継所過疎の山波無言なり 可住
 ニュースへ雑音となる妻の愚痴 里風
 事務所もピンポンで呼び出さ 無人
 放送を録取り上げたままで聞き 千翁
 あと向きに先頭進む放送車 無人
 佳
 放送局に勤めて口の重い性 魚山
 満員へまだ放送で詰め込む気 本蔭棒
 人の声ききとうなってイヤホン 古方
 八月になると玉音思い出し 弘生
 寒いホームへ放送十分待てと云う 秋月
 人
 チャンネルを切つて私の夜が来る 宗義
 逃げ腰を捉えマイクを突きつける 軒太楼
 天
 イヤホン何を聞いている笑い顔 不二
 軸
 のど自慢でてみたかった鐘ひとつ

緑陰のかたらい毛虫におどかさ 寿美子
 窓あけて新緑の候と書く便り 軒太楼
 借家から緑も入れたプラン練り 静泉
 父の遺志実り緑が香る山 右近
 マイホーム夢は緑の丘の上 カズエ
 緑地対策後手々々宅地に虫ばまれ 茶雅
 財産はないが憩える緑持ち 草山
 残雪をどかせばたくましい緑 魚山
 苗木してやがて緑の夢を持ち 緑水
 足摺で早い緑をみて帰り 伶人
 緑深きとこで眼帯とつてみる 苦句
 ボッリつと緑いのちのあった色 可住
 小鳥啼く緑に老を慰わせる 落猿
 めでたさは苔深々と福寿草 古方
 鉢植えの緑が匂う朝の汁 悠義
 休耕田緑がにくい程しげり 松泉
 雑草の緑に春を教えられ 花明
 春一番準備怠りない木の芽 一風
 新緑に埋れておわす石仏 豊生
 左遷よし緑の風が吹きぬける 白水
 幸せは緑したたる中に住み 白く
 一坪の我が家の緑にさえ野鳥 どんたく
 緑無き文化の中にある吐息 春日
 緑まだ僅かな道で大試験 バット
 その艶に希望持てそう樹の緑 凡九郎
 緑濃き山幸せはどこにある 七面山
 緑とは童話の森の森の色 曉童
 緑色の服着てデートの足はずむ 綾女
 セールスは緑地もあるというて 翁童
 緑地帯小鳥も人も甦り 思月
 バイパスは史跡と緑にカーブさせ 木魚

警 察

嘉数千代香選

緑なる大地をブルドーザーが食う 素身郎
 一坪の庭の緑を宝とも 本蔭棒
 若さよし緑の黒髪なびかせて 肖二
 新緑のうまさ添えて岩清水 芳子
 雪どけを覗きこませている緑 千翁
 緑着て心は燃えるものを持ち 隆子
 フィルムで街へ緑を持って去に 本蔭棒
 眼帯の奥で緑が映えている 道子
 緑色わたしの明日のフィクション 千翁

佳

春の神枯野に緑塗りにくる 度
 許された試歩へ芝生の若緑 代仕男
 故里の緑と比べている絵の具 道子
 みの虫の夢は緑の風に醒め 宵明
 キャンパスは緑萌え出るものが 弘生

人

緑刻ぐ山の叫びが聞えそう 正彰
 地 緑児を抱いて人情話聞く 里風
 天 盲目の杖に緑の香が語る 耕水

警察も腕を組んでる物価高 里風
 威勢よく警察へ来る出前持ち 松花
 警察へお勤めですかとけむがられ 七面山
 警察署竹刀の音で夜が白み 奴彦
 春闘を羨やんでる警察官 鳳
 警察と云えば酒屋も貸してくれ バット
 警察の庭にも春を告げる花 素身郎
 おごそかにスピード違反告げらる 敏
 警察へ胸張っていく用が出来 千翁
 警察のカンがはずれた日のあせり 豊生
 この町の人から警察親しまれ 緑水
 警察のお茶は予算を持たぬ味 曉月
 警察大鼻に自信の特技もつ 祥童
 警察を出て競輪でまた出合い 持
 制服を脱げば警官いい親爺 藤
 警察に縁がうすうて日々平和 紫風
 呼び出しの通知へ心の燐ふる夜 宏
 警察の隣り空果に狙われる 耕水
 目撃をして二度三度署に呼ばれ 静泉
 警察を見る目拗ねてるなと云われ 悠泉
 警察と聞けば曲げたい脛があり 天涯
 警察署大きく新聞種の町 弘生
 警察が頼もし空果にやられた日 古心
 警察がテンヤワンの汚職沙汰 寿美子
 警察も多忙三面記事あふれ 肖二
 警察の呼び出し血圧また上り 芳子
 警察で空の財布と再会し 失名
 避地では警官名士の仲間入り 度風
 更生のもう警察もこわくなし 与人
 裸婦飾りたい警察の応接間 重人

賞

警察の妻で近所が親しめず 思月
 警察へ感謝よい子の花匂う カズエ
 泥棒から見ると警察スキだらけ 洋々
 温情に触れ真犯が泣いて詫び 白水
 事故ゼロに今日の警察あつたかし 古方

人

人生の裏ここに在り刑事部屋 与史
 警察の酔えぬ桜がまた招く 芳子

地

迷宮の声なき声に責められる 白水

天

永宗宗義句碑除幕記念川柳大会

月 四月七日(日) 午前十時から
 会 岡山県和気郡佐伯町加三方(かみ
 場 がた) 永宗宗義宅

兼 題 「永遠」 児島与呂志選
 「除幕」 浜田久米雄選
 「信念」 杉原 胡風選
 「盗」 横山 一声選
 「慕う」 行吉 照路選

席 題 三題当日発表(各三句以内)
 会 費 五百円(昼食・記念品・発表誌)
 出 席 者 出席の旨を三月末日までに会場宛
 ご通知ください。兼題は当日持参
 投句者 切手二十円五枚を添えて三月末日
 までに会場宛。発表誌呈。
 ・兼題三才呈賞(出席優先)
 大会準備委員長代表 浜田久米雄

初步教室

題「美」

本田恵二朗

遊びということとは、さして大きな目的や目標のあるものではなくて、強いて云えば、楽しむことが目的である。従って苦しむのは願ひ下げということになる。苦しむぐらいならやらぬ方がましだと思えてくるのが遊びだと云い換えてもよい。川柳をただの遊びだと思つてゐる人がないでもない。私の周囲にもそんな人が幾人かいて、なんとなく川柳めくく七音字を吐いては悦に入つてゐる。さも楽しそうでもあるが、名句佳吟は生れてこない。私はそれもあるやうと思つてゐる。と云うのは、それらの人は川柳愛好者であると思うことによつて、大目に見てあげるといふことである。またそれらの人は、一向に進歩しないばかりか、いつかは消えてなくなる人でもある。苦しむことを願ひ下げにする川柳人は、いづれはかくなるにある。故路郎先生が定義づけられた「川柳は人間淘汰の詩である」ということを目標にしたならば、川柳はただの

遊びであつたり、楽しみであるだけでは、到底叶わぬことになる。そこに思索という苦しみがある。それが川柳作何力の進歩となり、人間形成の源泉となるのである。皆んなもつとつと苦しみうではないか。そして「一句を残せ、命ある句を創れ」と言われた故路郎先生の足跡を追いかけるようではないか。

ことさらに新聞美談に仕立上げ

（三面記事うまく美談に仕立上げ）

口重い父だが無欲が美しい

（口下手の父の無欲が美しい）

美しいお顔が酔うてからみだし

（酔狂が美男の顔を虎にする）

画用紙のママは実物より美人

（画用紙のママがあんまり美人過ぎ）

美辞麗句もう聞きあきた披露宴

（披露宴欠伸が出そうな美辞麗句）

打ちあけてしまえば冬空美しい

（美しい言葉全身冷えてく）

あばたも笑くば頭冷やして美の再考

（美の再考あばたがあばたに見えだした）

美観地区身動き出来ぬ人の渦

（身動きをさせぬ連体の美観地区）

ジョコンダの美へさわやかに息を吐く

（ジョコンダの美へさわやかに息を吐く）

バラの美にトゲあり風も病んでゐる

（行きずりの女性に働く美を見つけ）

（行きずりの女性に働く美を見つけ）

（行きずりの女性に働く美を見つけ）

（行きずりの女性に働く美を見つけ）

（行きずりの女性に働く美を見つけ）

（土俵入りこれ見よがしの男性美）

この母を選んだ父の審美眼

美人ママ笑つて過去に触れさせず

美しく寂しく老の針供養

自分では美人の角度で見る鏡

美しくありたい性が謀反する

モナリザの微笑美人であればこそ

美も醜もなべて真白く包む雪

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

（美醜もなべて真白く包む雪）

露 杖

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

大 萬 川 柳

「新 調」

入選発表

選 者 川 村 好 郎

投句総数 五百五十五句

入 選 六 十 七 句

倉 敷 翁 童

新調のクラブにスコア笑われる

松 原 万 竿

子の晴着だけは新調したい春

松 原 重 人

新調の顔で出てきた美容室

神 戸 静 泉

馬子にも衣裳と新調おだてられ

兵 庫 可 住

新調で行く給料のたかが知れ

和 歌 山 太 茂 津

新調を着たが気付いてくれはらず

西 宮 百 酒

新調は着たし天気は氣になるし

尼 崎 利 美

二号には新調妻は染め直し

神 戸 どんたく

春や春せめてカーテン新調す

高 槻 潮 花

新調で出掛けるほどでない見合い

岡 山 千 代 香

バラ色の未来を托す家具を撰る

郡 山 カズエ

新調の靴にリズムがついてくる

大 阪 十 止 庵

新調が間に合い出席する返事

神 戸 牧 人

新調の靴も足音同じ父

直ぐそこに春飯縫い出来上り

藤 井 寺 吸 江

新調の頃の値段をふと思ひ

五分開だけのテレビへ新調し

富 田 林 弥 栄 子

恋もなく自己満足という新調

新調を佳人の顔で着る女

松 江 晃 男

新調の不満算笥で眠られ

新調で飾り心は古きまま

堺 天 笑

新調はどれも特価で足りる妻

恋人のセンスでドレス眺める

富 田 林 花 梢

新調に背のびしている親心

新調にさらうように雨となり

倉 敷 克 枝

新調もしたい赤字もなくしたい

新調で行けば傷つく人がいる

羽 曳 野 幽 玄

新調の服も噂にされる秘書

新調の服で代読する祝辞

倉 敷 里 風

新調の靴がすねてる待ちぼうけ

羽 曳 野 敏

新調の靴が知ってる嬉しい日

新調が心機一転せきたてる

平 田 代 仕 男

外遊ヘトップメイドを急がせる

新調ヘ社宅雀のさわぐこと

寛 屋 川 度

新調の靴が年始の足をかみ

新調をしたたらと背広から云われ

新調ヘ向けるお世辞にある妬心

新調に待ったをかけた物価高

新調と見抜く素早い瞳も女

新調をどうせ月賦と見る世間

新調はせぬ氣値上げに小さい意地

新調をはめる笑顔が歪んでる

新調をせめて黄泉へ着せてやり

新調ヘ当り障りのないお世辞

佳 句

貝 塚 つき子

最新のモードで転びにくいスキー

ニユーモードよりよがし氣付かない

大 洲 曉 明

新しい軍手働き初めの白

新調の出来ぬ畳に陽はまとも

大 阪 緑 水

新調の背広空振りして帰る

今 治 伊 津 志

新調で包む心の古い傷
人ノ句 松原 重人

新調が利かぬ人間ドック入り
地ノ句 大阪 凡九郎

新調で女は何に身構える
天ノ句 大阪 十止庵

新調を着てゐる女はよく笑い
選者 吟

再婚へせめて心は新にする
昭和四十九年度
ベストテン (二月現在)

一	十止庵	八〇 大阪	一〇	度	牧人	四〇 神戸	二〇 緑水	二、五 大阪
二	花梢	五、五 富田林	一一	代仕男	芳子	三〇 平田	昭和四十九年度第四回	以下略
三	静馬	四、五 宝塚	一二	里風	泉	三〇 島根	「私」五句以内	
四	つき子	四、五 貝塚	一四	重人	美代	三〇 倉敷	締切 三月二十日	
五	本藤	四〇 奈良	一五	弥生	酒	三〇 神戶	第五回	
六	柳宏子	四〇 大阪	一七	幸太郎	百	三〇 松原	「馬鹿」五句以内	
七	梁水	四〇 倉敷	一八	酒	百	三〇 富田林	締切 四月二十日	
八	凡九郎	四〇 大阪	一九	幸太郎	百	三〇 東大阪	投票先	
						二、五 西宮	〒593 堺市堀上緑町一の三七	
						二、五 堺	藤井一二三方 大萬川柳係	

きのう・きょう

本多 柳 志

◇今年には参議院の半数改選の年である。選挙戦は既にはじまっている感じだが、青島幸男や山田勇らが再選を狙っているし、女優の山東昭子も出るらしい。各党何れも人物に恵まれず候補者の選定には苦慮しているようだ。先日発表された公認の顔ぶれを見た感じではいずれを見ても山家育ち、新鮮味に乏しく全体に小粒になった感じである。タレント候補といえば、以前菊池寛が立候補したことがあり、吉川英治が応援演説に立って斯んな話をした。或る温泉地でカジカの鳴き声があり佳かったので東京へもち帰って自家の庭の池に入れた。二、三日はいい声で鳴いていたの

にいつの間にか元から居ったカエルの鳴き声に同化されて、折角のカジカもギョロギョロというカエルの声になってしまった。立派な新人でも一度議会に入ってしまうと、折角のカジカもカエルになるのが普通の例である。菊池君はどこに居ても変らぬ人間である。議会へ入れてもカエルの仲間にはならぬこんな人を、みんなで議会へ送り込もうではないか。とぶってやんやの拍手を受けた。こんな調子で菊池の演説会はどこ会場も大そうな人気であった。が菊池は落選した。

浮動票手の鳴る程は集らず 柳 志

菊池は二度と候補に立たなかったが、吉川氏の演説の主旨は今もちゃんと生きている。世間に居るときは可成りきれいな鳴き声の人も国会入りすると人が変わったようにカエルの仲間入りをするようである。

当選をすれば汚職も知っていた 柳 志

◇この頃の代議士に比べて昔の議会はもっ

と良かったという人もいるようだが、之は考えものであつて昔の選挙民のレベルは平均して低かつたので、其の水準で比較すると議会は人はいくらか上等に見えたのかも知れない。戦後は国民の間の政治的関心も向上したし、知的水準も平均して高まって来ている。つまり選挙人のレベルが高まったから、それだけ国会人のレベルが低く見えるのではなからうか。下から見上げるのと、二階から見下ろすのとでは同じ庭の木も違つて見えるものである。西高東低は冬の天気図を表す氣象用語だが、選挙運動を冷かして声高頭低はコント作家のよく使うジョークである。私共作家の間には眼高手低というのが有る。句を見る眼が肥えて来ているのに比べて、作句力の方はそれについて行かないもどかしさを言つたものである。自分の眼識が高まつたことから、他人の作品を安く見るようなことのないように、おたがいに注意したいものである。

柳界展望

(原稿締切毎月末)



金婚祝賀川柳句会の西出
甚吉・一栄ご夫妻

(カメラ・岳人)

- ▼生々庵主幹は好郎副理事長と共に一月二十七日開催の第9回岡山川柳大会に出席。百余名の盛会だった。なお主幹は岡村久志良氏から霞乃先生への贈り物を生駒へ翌二十八日に届けられた。霞乃先生はお元気である。
- ▼第21回大萬川柳大会は新築の「大萬」で二月二十四日午後一時から開催。前年度の梅星賞藤岡花梢さんにはトロフィが授与された。詳細は次号に。
- ▼麻生霞乃先生から河野春三氏宛の「俺に似よの句など」(麻生路郎篇を読んで)という手紙が川柳平安二月号に載った。内容は原句尊重について述べられたものである。
- ▼沖田いし著川柳句集「華」(非売品)は著者の生活に始終し、未亡人になるまでの句やその以後のものもあり、序文は斎藤大雄氏。一草今日も底の深さを言わず昏れいし。発行所札幌市東区北二十一条東三丁目、札幌川柳社。
- ▼第19回全国川柳作家年鑑参加作品公募。参加費千円。締切日49年4月末日。問合せは〒611奈良市西大寺国見町一四一一。伊藤勢火宛。
- ▼第4回紋太忌川柳大会は4月7日10時。会場は神戸市総合福祉センター15階。題ーリンゴ・明るい・水・島・砂・半日・眠る(各2句止)。会費五百円(昼食を含む)。席題なし。ふあうすと川柳社。
- ▼時の川柳。第七回東洋樹川柳賞は武玉川文芸社の下村梵氏に決定。この贈呈式を兼ねた川柳大会は5月3日開催(本誌P59参照)。
- ▼川柳東京35周年記念大会は2月24日午後一時から発明会館ホールで開催。
- ▼川柳人47年度垂天賞は皇陵の巨岩に奴隸の血が臭うー友田中間子氏に獲得。
- ▼川柳天守閣40周年三輪喜正喜寿祝賀記念句会は3月3日開催(本誌P58)。
- ▼川柳研究社年度賞表彰第二回川柳大会は5月19日正午から中央区新富一十六
- 一五印刷会館で開催。題・見識(考人選)真つ二つ(六道郎選)風船(水華選)エネルギー(黙六選)一長一短(茶六選)雑詠(蓮夫選)席題三句各題三句。投句締切5月10日、投句料二百円。投句先〒一一三東京都文京区根津一一五一一二吉岡宵波宛。
- ▼川柳ひろしま二月号は新年交歓36題大会号。
- ▼高木幸太郎氏(堺市)の句集「古来稀」刊行記念句会が12月16日備徳で開催。生々庵・好郎・摩太郎・青香諸氏が出席。句集の序文に生々庵主幹が筆をとられている。
- ▼清水美江奉寿記念並第十回埼玉川柳大会が6月30日に県立労働会館で開催されるが投句者の題は「技術家・愛人・鳴かず飛ばず・蔵書・一つ椅子・街の灯・忘れ物・祝吟一句記名の」と。各三句。締切6月15日。投句先〒336埼玉県浦和市常盤九一四一六、埼玉川柳大会(武藤方)。
- ▼柳宴二月号は20周年記念特集号。全国から百七十名の参加で盛会だった。▼きたぐに12月号は前田義風句碑建立特集。
- ▼同人の動向
- ▼八木摩太郎氏(堺市)は一月十日読売新聞掲載の小説の四季・森鷗外の堺事件・妙国寺の土佐十一烈士について同社の来訪を受け、また堺PR新聞二十周年特集号にも同氏の句碑が大きく登載されたが、この句碑除幕式の模様を葛村画伯の8ミリ作品が映写、これを複製、家宝にされた由。
- ▼尼緑之助氏(出雲市)から「わたしの方の小さな柳誌でさえ印刷所に手こずっているのだから本誌ほどになれば大変なことだと思います」。
- ▼河村日満氏(鳥取市)は参議院選の一参謀として活躍されている。
- ▼飛田好一氏(大阪市)は一月二十四日NHK「ごきげんさん」の「酒」のテーマに出演。氏は断酒の会のリーダーである。
- ▼西出一栄さんの金婚祝賀

川柳会は1月20日に開かれたが、一栄さんのお人柄やあいさ、智子、君子さんらの電話PRが六十名近い盛会にした。栗副主幹や和歌山の太茂津、千寿子さんも出席、一栄さんご夫妻を祝福された。

▼垂井千寿子さん（和歌山市）は西出一栄さんの金婚祝賀句会で天位「金婚は結婚式を思い出し」で楯を獲れている。

▼野村太茂津氏（和歌山）から一栄水氏の亡きあととも好郎氏をはじめ薫風、柳宏子、岳人諸氏の一月句会ご出席で盛会でした。なお二月四日の常任理事会に出席した氏はその前に千寿子さんと共に一三夫氏に会い一栄水氏の遺句集出版の相談をされた。

▼清水一保氏（鳥取県）から一目下町議選の最中で日夜苦闘中です。そんなわけで作句活動も苦戦中です。

▼柳梨鶴丸氏（松江市）今年から労組の第一線を退き安来地区労協と勤労者互助会の副会長として活躍されている。

▼小野克枝さん（倉敷市）はご商売の洗済パニックでご夫君と共に大変苦しまれたとか。一洗済の卸屋とい

新同人紹介

錦織文子

松本昌

薫風・栞・水客・明朗・白汀・推薦

吉川米子
トク子・浩輔・一三夫・推薦

う恨み買う一克枝。

▼山田季賢氏（高槻市）一月十四日足摺岬方面から中村市ニュー中村ホテルへ一泊、そこで吐血、同市森下病院へ。二月二日伊丹空港から大阪鉄道病院へ再入院目下療養中。一日も早いご全快を祈ります。

▼恒松町紅氏（松江市）交通危禍で松江市日赤へ入院中のところ、やっとギブスをはずしたとのこと、ご全快の日の早かれと祈る。

▼林野避光氏（呉市）は、一月中旬、呉市青山町一丁目三七、国立呉病院三病棟三三〇九へ入院。ご全快の日を祈ります。

▼関美子さん（米見市）から「富山方面での川柳塔の宣伝が大部分おこなわれていますね。毎月こちらの人に本誌を何人かに送っています。こんな立派な柳誌がほかにあったのかなんて云われるとアタマにきまずと。」

▼堀江芳子さん（島根県）から「豆秋さんの句や老いの坂から肉眼まで各句集をテープに入れ正朗に聞かせ

ていますが、読み手が私では感じが出ませんけど。」

▼大路美幸氏（八尾市）は二月九日ヨーロッパの旅へ立たれた。十八日帰日。

▼橋高薫風氏はマンスション建設中で大忙しのこと。

▼若柳潮花氏（高槻市）から「水客、紫香両氏と共に三羽鳥は一月二十一日伊良湖から恋路の浜、藤村の詩碑を見学。なお三月は踊りの会があると。」

▼菊沢小松園氏（大阪市）は一月六日伊勢詣りから伊良湖、伊豆渚ラインへすみ子夫人と楽しい旅をつづけられた。

▼小出智子さん（大阪市）は一月二十六日からハチ北高原へ令息とスキーに行き自然美の中で童心に還り楽しめました。

▼不二田一三夫氏は新聞関西新聞サンデー読切小説「六十男と六十女」と「童貞食い」を発表。

▼工藤甲吉氏（青森市）の令閨みささん（五十三歳）は一月九日逝去。かねてご病氣だったことは玉句から

拝承していましたが、ああ——合掌。

▼宮西弥生さん（東大阪）の母堂百合さん（70）が二月九日肝臓病で逝去。十一日久宝寺の自宅で告別式。好郎・栞・小松園氏は川柳人が多数参列した。

3月の句会

▼菜の花句会——十一日午後六時から——題・友・憧れ・指・卒業。会場——近鉄八尾駅下車北へ百米。ボウルパシダ三階会議室。

▼堺・若芽川柳合同句会——十三日午後六時から——題・風当り・伸びる・流れる・友・会場——摩太郎宅。

▼南海川柳会——十四日午後六時から——題・年度末・手づくり・早とちり。会場——南海電鉄本社食堂内。

▼南大阪川柳会——二十日午後六時から——題・美観・びつくり・中年・苗。会場——未定。

▼川柳東大阪——二十三日午後六時から——題・受験・手入れ・生返事・カット。会場——東大阪市中央公民館第二集会室。近鉄永和駅南。

本社二月旬会

会場 以和貴莊

七日 午後六時

おいにくの雨で「きようは60名を割るぜ」が「ほほう、73名来てくださった」とは感激がいっぱい。

若本多久志氏の柳話は、満を持しておられた内容だけに、たつぷり一時間はほしかったが「枕」が前篇、「布団」が後篇のかたちになり後日あらためてということになった。人間と枕のつながりは古事記—日本紀からのもので、布団はゲンと時代があつたのである。枕とつくものを調べも調べたり、全紙二枚ほどにギッシリもろもろの枕がならぶ。枕ともなれば「成人向」が多いが、もともとは神秘なものであると。

一月旬会の不二也氏選の入選句の解説なども興味深く、だが時間がきてしまつた。

児島与呂志氏の令兄が入院中で、その代選を八木摩太郎氏がされた。

二月の月間賞杯は好作家香川醉々氏にかがやき「やった、」の声は八尾の人々である。

進行・西田柳宏子

出席—新之助・与呂志・正彰・生々庵・多

久志・古方・緑水・太茂津・柳志・花梢・雛久子・肖二・綾女・秀信・文秋・鶴声・千万子・摩太郎・滋雀・一三夫・百酒・儀一・敏・三十四・十止庵・一舟・静馬・水客・幸生・痴亭・形水・たかし・恭太・柳宏子・千寿子・瓢太・吸江・好一・素郎・茂男・いわを・喜風・葛城・小路・天笑・静歩・以兆・トク子・岳人・清人・好郎・智子・君子・牧人・凡九郎・寿子・雀踊子・史好・敏子・葉・美幸・米子・メ女・薰風・頂留子・小松園・葉・酔々・あいき・恒明・三郎・鬼遊・庸佑・葉子。

席選「屋根」

竹中肖二選

久し振り屋根のはこりを流す雨 好子
屋根裏で少女小つちやな恋育て 君一
屋根に草繁らせ詩人ひとと住む 秀信
サイレンに屋根師屋根から手をかき 静馬
大屋根を地面へ作る撮影所 一三夫
商魂は高架で見える屋根にまで 清人
中古車の屋根に値切れる疵があり 与呂志
大屋根の鳩に遅刻を見下され 柳志
降り出せばすぐに知らぬトタン屋根 文秋
わい屋根併せせうなピアノ鳴る 多久志
赤い屋根を誇り長寿という家系 柳宏子
貫録は高く積まれた髪斗瓦 花梢
屋根から見れば隣も貧しい台所 十止庵
王朝の屋根に歴史の艶光る 太茂津
ボクの家は屋根だけビルのかげに立ち 十止庵
犬小屋の屋根にも愛称書き添える 滋雀
菖蒲湯の菖蒲は屋根に一夜寝る 綾女

すてきれぬ都会のひくい屋根に住み
見てならぬものを屋根から見下し
ロマンスの香りパリーの屋根の下
鬼瓦睨む古蹟の階を踏む 正彰
路地の屋根に住む人情のまま低し
屋根葺きの釘は口からはき出され
屋根裏も搜索されて汚職 綾女
補回戦屋根の影踏む甲子園 好郎
住みなれた屋根は視界の点となり
赤青の屋根が緑を消してゆき 肖二
茅葺の屋根で本家が小さく住み

席題「体裁」

城一舟選

体裁が悪いと祖母の育児法 敏
体裁を気にして中味放つとかれ 百酒
体裁を気にして世間せまく生き 静馬
体裁より母は下着に気をつかい 幸笑
ご臨終から体裁を教えられ 多志
体裁の要る年ですかと始めている 久志
体裁のよい挨拶のうつるなる 吸江
体裁をかまう娘に気を使い 千子
体裁も夢も忘れた妻といる 美幸
だしぬけの見舞へ髪をかきあげる 与呂志
体裁を意識しているまま写り 三十四
体裁を作る咳も一ついれ 生々庵
堂々の体裁上げ底の火が見えず 緑水
体裁の悪きライターは火が割ける 岳人
鉢巻をすれば女もけなげなり 吸江
体裁のよい包装に引つかかり 葛城
流行になれば体裁よく見える 文秋

体裁のよきで建売り売れて行き
体裁にうずもれ月賦片付かず
体裁の中で埋もれている旧家
精一杯の体裁心干からびる
ヒッピーの髭は体裁かも知れぬ
体裁で僅かに自分支えてる
外観を飾るに怖い金を借り
死線越え夫婦体裁もう言わず
柳志

席題「火傷」

小浜牧人選

物思い指を煙草で火傷する
子の火傷跡に一生責められる
火遊びへ男四十のうけた傷
良縁へ火傷の跡を言いそびれ
アラビアの戦火日本が火傷する
友情は火中の栗を拾うてやり
死ぬほどの恋の火傷がしてみたい
飛びかかる火の粉ははらわぬ正義感
大やけど女かくせぬ過去をもち
舌やけどしそうなヒレ酒を喜ばれ
一生の借をこさえた火傷跡
火傷して始めて社会の怖さ知り
湯たんばでやけどする程眠りこけ
火遊びの火傷家裁でけりをつけ
ホータイが小さな火傷をひどく見せ
火傷してからドライになる女
生い立ちの火傷の痕が物語り
火傷のあとがうずく敗戦歌
ひとり者火傷しそうな火鉢だき
火傷せぬようにと自重するも齢
新妻の指の火傷がいじらしく
あいき

中年の火傷をかばう何もなし
恋の火の火傷の跡が消せなくて
相談欄別れなはれと言う火傷
年老いて恋の火傷と話されず
湯タンポの火傷へ看護婦笑い出し
末つ子の火傷ごときをだいにし
オアシスに心の火傷癒そうか
昼間からテレビに熱中火傷する
火傷癒えても火事の恐怖はまだ消
罪もないヤカンに火傷腹を立て
火傷せぬ程度で妻は攻めてくる
自画像は火傷のあとを隠さない
火傷してからの女の強くなり
苦味い酒心の火傷まだ癒えず
占師恋の火傷も見逃さず
火傷してから世渡りの知恵がつき
素人の知ったかぶりで火傷する
牧人

兼題「前後策」

八木摩天郎選

禿げたのが額あつめて善後策
善後策まだまでもめる示談金
カー事故に田んぼ一枚売ると決め
善後策子供のこととは妻まかせ
善後策の果ては徳利を枕とす
善後策お役所さんを歯がゆがり
善後策どころかパチンコはじく父
縄のれん隅で練つてる善後策
どろぐりの思案にある善後策
懐る手善後策には加わらず
善後策結局夜逃げすると決め
いざ金となつてもたつく善後策
静馬

川柳「天守閣」創立四十周年
三輪喜正喜寿祝賀

記念句会

日時 昭和四十九年三月三日(日)
午前十時開場

会場 大阪市東成区役所 三階 区民
ホール(地下鉄・市バス今里
下車北西へ二百米)

兼題 後輩橋本言也選
登る西村芳川選
みどり大塚千葉選
浮く加賀破竹選
今日金泉萬楽選
石垣吉田桂太選
情熱田中桂太選
飾る寺尾新児選
桃菊沢小松園選
祝三輪喜正謝選

(イロハ順)

出句締切 十一時半(休憩・昼食)
開会 一時、終了 三時半
各題二句宛出句は出席者に限ります。

会費 千五百円 昼食、御飲物、記念品
柳誌二月号並びに発表誌三月号呈
送 570 守口市豊秀町一ノ一九
TEL (九九一)〇五六八

川柳天守閣

大物に手のとどかない善後策
 善後策出来て孟上に向け
 張つたりでゆくよりほかない善後策
 善後策賛否二派でも宴は別
 善後策長屋の知恵をかき集め
 次官から耳打ちされて御答弁
 善後策ああの頃は若かった
 善後策結局僕が邪魔にされ
 人命を金で見積もる善後策
 とりあえず事荒ら立てぬ包み金
 善後策やけにウイスキー減るばかり
 善後策さて警察にコネも無し
 一日がこんな早い善後策
 善後策やっぱり妻へ電話する
 善後策まとまらぬまま妻と座す
 当人へ因果含める善後策
 金で済む善後策ならたかが知れ
 善後策弁護士さんに聞いてくれ
 最後には自分が決める善後策
 善後策頼母子落せばすむ話
 善後策女の親が折れて出す
 善後策金を出せの飲ませろの
 摩太郎

兼題「皮肉」

本多柳志選

姑の善意を皮肉と受ける嫁
 皮肉られても難壇にしがみつ
 皮肉にも僕の意見が入れられ
 抗弁の中にチクリと刺す皮肉
 百姓の土を離れて皮肉られ
 ぶつぶつと皮肉言つてる負け惜しみ
 梯子酒妻の皮肉を置き忘れ
 芳子

夜が明けてや々と皮肉な謎が解け
 皮肉もう姑の愚痴と聞き流し
 交渉に皮肉のうまい人を選び
 皮肉とも取れる言葉でしめくくる
 投げつけた皮肉をそっくり返される
 人の世の糸は皮肉な綾となり
 お忙がしいですねと税吏うす笑い
 モナリザの微笑で皮肉返される
 おおらかに生きて皮肉へ礼を言い
 最大の皮肉女が女ほめる時
 川柳家だから皮肉と皮肉られ
 貰い手をしたら子供が出来ました
 幸一パイ皮肉言うても嬉しいが
 好きという弱身へ皮肉ささらない
 使えない年頃に来て金がで
 皮肉とも見えず白紙の委任状
 値上げ分客の皮肉をあびせられ
 皮肉にも別れた人とパスで遇い
 吊皮の指のダイヤと耳の垢
 小姑が嫁いで女房太りだし
 下積みの悲哀皮肉にジツと耐え
 女四十皮肉を言うている嫉妬
 日本一の世相を笑うノンキ節
 劣等感ほめても皮肉かと思
 皮肉言う性で皮肉がよう判り
 皮肉とは知らぬ若さのいじらしさ
 大学を出てない方に養われ
 腰抜けと笑うた奴に雇われる
 福耳の皮肉聞かないことにする
 聞きようで皮肉とこれる話しぶり
 ライバルへ祝辞を述べる羽目となり
 正朗
 智子
 維久子
 水客
 柳宏子
 好一
 小路
 鬼遊
 太茂津
 恭太
 史好
 あいき
 花梢
 三郎
 生々庵
 敏
 葛城
 千萬子
 静馬
 多志
 雀踊子
 雀踊子
 文秋
 天笑
 維久子
 吸江
 静馬
 静歩
 三十四
 牧人

兼題「セメント」

傍島静馬選

通じない皮肉明治は遠くなり
 さりげない皮肉で恩義絡ませる
 左遷とは知らずバンザイして送り
 焼跡に消火器ひとつ焼け残り
 姑のいかにもひくく咳払い
 皮肉にも別れ話の熱いお茶
 出る杭となつて皮肉を聞いている
 返すもの返し皮肉を置いてゆく
 皮肉屋の皮肉の皮肉皮肉られ
 柳志
 弘生
 幸太郎
 季賛
 芳子
 正朗
 一栄
 与呂志
 緑水
 一三夫
 百二酒
 肖二
 儀一
 幸生
 たかし
 鶴声
 柳志
 天笑
 柳志
 新之助
 鬼遊

兼題「廊下」

正本水客選

ない無いずくしセメントよお前もか 多久志
セメントの毒を金魚がテストされ 一舟
セメントの不足に延びるマイホーム 柳宏子
セメントに人間埋める乱歩作 一三夫
セメントの壁で区切った核家族 止庵
甘くみたセメント塗りが手に負えず 恒明
鼻唄のわりにセメントこねとらず 小松園
セメントで村の歴史を塗りつぶし 多小松
セメントの地蔵ご利益疑われ 多小松
セメントを詰めて由緒の梅が咲き 水客
セメントの扉もくずれて元華族 摩天郎
左官屋が職人減らすセメント危機 静馬

茶室までの廊下を梅の香が包む あいき
底冷えの白い廊下へ咳が洩れ 牧人
廻廊を清め信者の心足る 喜風
すれ違ひさま廊下に女の火花散る 頂留子
廊下から打水されて花は泣く たかし
回廊へ春を呼び出さず火の行事 滋雀
下校の子渡り廊下をふみ鳴らし あいき
ヒモというのが口笛で来る廊下 止庵
試歩今日も長い廊下に挑まんか 柳宏子
辞表出す訳を廊下で聞きただし 緑水
廊下曲ってから黙って渡すものが 柳水
ランチタイムの廊下ピンポン玉跳ね 形水
陳情の廊下で寒い会釈する 静歩
アパートの廊下の足音が部屋だ 茂男
看病の疲れ廊下に捨てに出る 花梢
遅刻した子供に廊下静か過ぎ 恭太
地下道を廊下と思いいける花 茂男
特ダネを廊下トンビにしてやられ 秀信
廊下みたいな国や地図を見ていて 古方
二ヶ月の古都の廊下の春を踏む 美幸
産院の廊下で道化師になる男 雀踊子
思ひにおす長さに廊下出来て 小松園
スリッパの音無作法に行く廊下 以兆
も一人のわたしが追って来る廊下 鬼遊
旅館の廊下長いから兎が走る 文秋
マンションの廊下会釈する人しい人 栗馬
立たされた母校の廊下に佇つてみる 静馬
颯爽と白衣往き交う長廊下 葛城
木造の母校の廊下にあるぬく味 千寿子
擦乱と廊下本日PTA 酔々
団体の鶯張りを渡る冷え 水客

▼前号P57「新同人紹介」の住所訂正。
▼梅原 秀子 〒699-13 鳥根県大原郡
木次町八日市二六〇。
▼梅 みどり 〒699-13 鳥根県大原郡
木次町八。

★

川柳大会

第七回東洋樹川柳賞贈呈

（第七回東洋樹川柳賞は武玉川文芸社（新潟）
の下村梵氏に決定しました。）

日時 五月三日（祭）十二時
会場 明治生命ビル大ホール
脚 神戸市葺合区磯上通八一九一六
神戸市役所花時計東向い

兼題

「潔癖」川 柳 塔 橘高薫風選
「打つ」ふあうすと 葵 徳三選
「ヒゲ」番 傘 金泉萬楽選
「嫁」平 安 堀 豊次選
「階段」ますかつと 大森風来子選
「空」時の川柳 三條東洋樹選
・各題二句・欠席投句受付す
「川柳仁義」 下村 梵

記念講演

会費 五〇〇円
知事賞・市長賞・教育委員会賞等
合点一〇位まで。

賞 費

柳画展 藤原英比古氏（柳画研究会主宰）
特別参加の川柳色紙展あり。

主催 時の川柳社



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。書式は発表誌のように下三マスに雅号。

川柳わかやま

野村太茂津報

トラの子の祖母の財布はたかが知れ 千寿子
虎の威を借りて今年も生きのびる 十郎
今年中虎で間に合う床飾り 与士男
虎穴にも入らず若者世をすねる 己恭
二年後の設計だった妊婦服 由美子
設計の時からもめていた間取り 富子
一女二男つくる積りの設計図 としよ
マイホーム心の隅へ建ててみる 芳童
あと一歩こが性根の見せどころ 城石
もう一歩じつくり腰をすえ直す 柳宏子
東西の声貫通へもう一歩 白光子
もう一歩譲れず労使夜を徹し 好郎
もう一歩と激励されて賞にもれ 英子
一年の計元旦の墨をすり 福水
一せいにスタート俺だけ飲んで 薫風
短距離ヘスタート太く生きようか 岳人
再出発悲しい過去は振り向かず 吉野
出発へ同志出揃う有難さ 太茂津

吉永川柳社(岡山県)

平井三与子報

小走りに小さな足音ついてくる
寒月の空小走りの音を吸い
買うことに意義あるような師走風
子を産めぬ人が笑った妊婦服
石油危機どこかで笑う奴がいる
団らん夕げの窓に笑い顔
夫の遺影私に残して笑い顔
年賀状一票ほしい字が並び
はげましを言葉に出さず酔いでく
人形になって家風に耐えている
主婦の会笑いがもれる年のくれ
少し間をおいてつんばが笑い出し
買い貯めへ中年肥りも小走りに
北風に気持よきそな奴つ子風
風車風の今日の日を埋めて置く
木枯しにめげぬ親子の十二月
かけ引がうまく運んでうす笑い
むらくも句会 藤井明朗報
生活のリズムを変えた物不足
お茶の間が静かになって雨を聞く
七転び八起きで不足よせつけず
来客があるらし茶の間釜がなる
人類の不足宇宙のちり一つ
雨不足 列島二分して不幸
ケチケチで今日も茶の間を湧かし
物不足 施設の子等のたくましき
主婦がいて茶の間の明り花も添え
吹雪く音消して茶の間の笑い声
物不足笑いとまらぬ者もいる
戦前派これが不足とは言わず
水仙 清春 惠美子 柳子 武夫 一声 三与子 宗義 伊久野 飴坊 幸仙 浄美 胡風 正州 芳明 秋月 芳月 久米雄 松月 孝華 みどり 澄水 鶏生 秀子 文子 恒子 信夫 一郎 登美也 蓮露

佳句地10選 (前月号から)

高杉 鬼遊 選

時計丸く十二時を指し今日終る
散髪に連れていかれる十二月
赤を着て愚妻は何を企みし
明日を信じて風船を飛ばそうよ
鏡見る目付幼女と思われず
心一つつかめぬ夜の鳩時計
同じなら愛を貰き愛に生く
美しい言葉日本にハイがあり
青い空でんしになってとびたい
方向音痴ネオンで確かめる
英詩 凡女 寿子 淳人 漁好 史き 聖地 美幸

どんぐり川柳会

谷垣史好報

前ぶれは親しい人で止めておき
四季バラのつぼみのままで冬を耐え
来て見れば前ぶれほどの事もなし
馬耳東風寡婦一直線に行く
前ぶれのない腹の児に親あわて
春までは訪ねる人もない蕾
福耳と易者ごときを母は聞きわける
前ぶれのクシヤミを母は聞きわける
散る花のさだめ蕾でいてほしい
停退の前ぶれ課が変り
名も知らぬ島に蕾のまま消える
ライバルが来て前ぶれを踏みつぶす
鬼遊 重保 美幸 小松園 儀一 好郎 太庸 祥月 白樹 江

何の蕾やと嗅いだりすかしたり
一徹の聞く耳もたぬ老詩人 蕉風
前ぶれへ風呂も湧かしてくれて
死に前ぶれないので人生面白し 痴亭
前ぶれは父の眉間にシワが寄り 吸江
川柳ささやま 河原みのる 史好

持ち寄りのネギはどさつと雪をつけ ひか平
持ち寄りの数の子だけに箸が寄り 初音
持ち寄りのパーティであり遠慮なし 無鬼
止むを得ず続けた職で文化財 梅枝
冷戦が続く隣りへ柿が落ち 英断
余韻もう元旦となる除夜の鐘 可住
不作同士ずるずるの五十 みのる
まだ続く読経正座の足うづく 近江
縁側で昨日の続き小豆選り つや子
女系三代しまり世帯がまだ続く 百合子
家の嫁トラブル起こす隙がない とも子
トラブルは美人の妻が種を蒔き 素水
常識で覗けぬ政治家の眼鏡 越山
宮仕えたまに常識はずしたい とんぼ
深入りに気付かぬ馬券握りしめ とおる
和歌山七面句会 中筋三幸報

信号を待つそれぞれの貌を待ち 芳童
急行は信号ある場所さけて行き 富子
秀才の正義の旗に集まらず 政一
梅干でソット知らせる赤信号 清治
秀才も愚才もありて世は丸く 勇次
語らいに池が聞いてる水鏡 凡次
そう急きなさんと信号無表情 太茂津
神様のようなが居て座が白け 城石
男性をのろう私の顔を見る 哲夫

相場らん半年先の世の鏡 彰朗
満身を写して嫁の三面鏡 光治
最初から赤信号のついた恋 福代
秀才の父の若禿だけ遣伝 政夫
ウインドーを鏡替りにバスを待ち 三幸
ハワイ川柳ウイロー社 林蒼蛇楼報

インフレで明るい暮しにひびが入り 草海
インフレに惜しまず貢ぐ里の母 拝山
一粒の米にインフレついて来る 三石
インフレ風どこを吹くやら楽隠居 小雪
インフレが月給袋とつり合わず 美和
インフレに乗って商売たくましい 萬里歩
女二人大根の値をかこち合い 風影
インフレも空吹く風と漫遊客 十吉
インフレのおかげで晩酌へらされる 水泊
インフレで好きな豆腐も歯がたため 河舟
インフレへ今日も溜息子沢山 快夢起

一分間の柳論

江戸時代、上流社会に歌があり庶民には
高根の花であったものと思われる。そこで
憂さ晴らしのため穿ち、風刺、ユーモアを
もってこれに対抗したのが川柳として生
まれたものではないだろうか。

川柳とは詩情があっても詩ではなく、季
感があっても俳句ではなく、リズムがあっ
ても語呂合せではない。と言うのが私の持
論である。

昔谷脇素文の漫画川柳が雑誌を賑わした
時代があったが、川柳家から見ればあまり

インフレよ世に悪循環のある限り 峯円
生きるためインフレ米も買って食べ 柳子郎
インフレを横目に走るスポーツカー 雪女
インフレにやりくり算段あえぐ主婦 稠雄
山家暮らしインフレなんぞ気にならぬ 蒼蛇楼
エネルギー危機インフレに拍車かけ 蒼蛇楼

南大阪川柳会

金井文秋報

逆さまに振れば財布の音がする 好郎
逆境に生きて平凡あたためる 太茂津
逆光に立ち俗論を囓うのみ 俊夫
もう僕の体臭消えていた古果 柳宏子
西成の古果に人の世の情 肖二
古果もう忘れて手乗り籠を逃げ 智子
停退の古果は置状でつないどく 正彰
古果まで俺の事など忘れてた 凡九郎
ぬれ衣が晴れて古果へ返えり咲く 水京
手不足を云うて他人にやらさない 静馬

木村 涼人

に低俗的で品がなく、川柳をボウドクする
ものだ、その意見が沸騰したものである。そ
れで川柳の品位を取り戻そうとする余り
俳句めいた句が目立ってきた。それは時代
の流れで仕方ないとしても、川柳の三要素
に余りにも欠けるのはどうかと思う。

人情風俗は日に日に変わるもので本当の味
のある川柳はこの中にいくらでもある。花
鳥風月を句にするもよからうが、川柳本来
の人間臭さのある句に今一度じっくり取組
べきだと思う。

一分間の柳論

柳 楽 鶴 丸

どつたりと喰うのに味の不足云い
そう不足云うなとそつと握らされ
水不足虹にもお目にかからない
うかつにも善人まことをしやべり
居合せていたのにひと言聞き洩らし
うかつにも妻にみられた請求書
あやとりへ女の指がしやべり出す
タクト振るはりが先生老けさせず
タクト振る父まだ若さ失わず
米とソが蔭でタクトを振る平和
川柳大阪 児島与呂志報

針二本つけたら鮎もくいついた敏
乏しくとも三度の飯の暖かさ誓二
物価高トイレットペーパー騒せる季
此の石がお花ですかと尋ねられ武
女でも男でも良い孫の顔漁人
ありがとう素直に云える子に育て
心では子供に詫る共稼ぎ徹舟
茶柱に母が笑った小さい幸重人
四十坂男冥利の酒の味洛醉
希少価値左ききにある魅力秀峰
大惨事遅れた時計で免れる道子
薄ばけた時計実家の音で鳴り本
帯ドラマ家庭の機能一時まひ否
胸の線一度は口説いて見たい人
親として晴れがましい席素直なり
川北明朗会 川口弘生報

浪人で十九の春が過ぎてゆき春果
老人の忘れぬ九月十五日生仏
産み捨てて十九の春の白昼夢静歩
九死に一生帰還してから事故死弘生

柳誌を見るたびに思う事は、川柳の臭い
がだんだんうすらいで行くように思う。選
者が変れば句も変わる、何故だろうか。命あ
る句を雑誌が本命だと云われた白柳師の言
葉が今も私の中に生きています。机上でひね
り出し、技巧によって立派な句が生れるは
ずがない。川柳は作るものではなく対話の
中から生れる生活詩であり、口頭詩である。
個性的な句は没になるとうよく聞く、これも
選者と投句者の対話がないからと思う。以
前に某選者が投句の際、年令職業別等を記

入してほしいと云われた事があった。投句
者を知る為に努力された事は立派である。
選者の主観で没にされるのはやむをえな
い。それが投句者の自信句であればショッ
クは大きい、もし両者に対話があったな
ら、又別な結果が出たかも知れない。個性
で体当りする事によって、選者と投句者の
真の対話が生まれ、名句名吟が生まれて来
ると信ずるのである。

迎合と妥協バイバイする日です 鶴丸

床柱撫でて九谷をほめておき鉄児
九十の母味加減へ口を出し三十四
九牛の一毛同志の愛重し太茂津
九谷焼湯呑みも夫婦で棚に居る志
九分九厘まとめた話に邪魔が入り繁
ニクマレ口上手にしやべる九官鳥濁水
九官鳥やたら教えてうるさがり満津子
暑い夏九月の声でほととした駒子
旅の宿家を気にして電話する晴平
蟬の声何が恋して泣くのやら秀村
破れない食器で食べるまづい飯ますえ
夫逝き時計のゼンマイ忘れ勝ちつね

どケチ元年くらしの知恵をふり返る星斗
元日というのに猫はもう昼寝茂児
希望子と孫につないで日向ぼこ立児
実力より見栄が八分の希望校好郎
今別れたばかり移り香まだ消えず瓢太
南海電鉄川柳会(大阪市) 辻圭水報
残業の稼ぎにカチンと所得税誓二
残業のお蔭は家計簿知っていた宏子
尻ぬぐいする残業と人知らず圭水
残業で飲む酒量も減りはじめ清女
残業を信じる妻に労わられ儀一
川柳たけはら 森井善居報

陽が照っているのになぜ淋しい日幸子
除夜の鐘、余韻は平和、平和にと寿子
願いごと一つにしばって初もうで一世

四方から鐘が鳴る鳴る想いごと房水
黙秘権使って妻のいじらしい文晴
物不足へ動ぜぬ姑がいてくれる蘭幸
何も願わじ健康な妻子の寝顔春昇

政治とは何だ答が出て来ない
かえつたらすぐにピアノをひきに
パパの手におえぬ子供がみんな寄り
今日終る友と笑いの口角力
戦犯に時効などある筈がない
月冴えて冴えて背信こわくなり
列島の危機へ冷えきる一円貨
冬やよし初心にかえる風の詩
近づいた母の忌山茶花咲き初め
共白髪までとは妻が言うてくれ
わからないから店員に選ばせる
このように灰になるのにいがみあい
騙す気の子の相談へのってやり
朝刊は勤務時間に読むと決め
鍋の音コトコト今日を生きる詩

著 居
いと
そのみ
紫 光
貞 子
鬼 焼
不 朽
文 明
英 詩
一 路
西 合
扇 水
季 贊
かつ子

地下足袋の底から冬が来た飯場路秋
川柳東大阪 竹中肖二報
結局は残った者が払われ 葵 水
残してる指紋に黙秘崩される 喜 風
宴会へナイロン袋持つ女 柳 信
残飯へ犬など飼うてもみうかな 一 栄
残業の言証証人も酔うていける 鶴 声
吸がらの紅へ嬌声まだ残る 宏 子
ささやきの甘い余韻がまだ残る 肖 二
過疎きびし残るは先祖の墓ばかり 誓 二
お互いに悔を残して来た妥協 柳 宏子
襟あしに名妓の色香まだ残り 水 京
死にはったそうなど誰の記憶にも 凡 九郎
体臭を残す男が憎くなり 雀 踊子
居残りへ飲んでも酔わぬ酒の量 小松園

雅号ぶっちゃけばなし (121)

きしよう



高橋 鬼 焼

たかはし

本名は「博昭」(ひろあき) 私のお
じが俳句の先生であつたため、俳句を
学び、その時につけていただいた俳号をそのまま
川柳につかっています。私の家は古くから瓦業だ
つたため、私も小学校を卒業後すぐに瓦業を手伝
っていました。瓦と言っても赤瓦で山陰地方でよく
見られる瓦です。屋根の棟の両端にかざる瓦を
鬼瓦と言っています。鬼を焼く商売なので、おじ
が「鬼を焼く」と書いて「鬼焼」(きしよう)と
俳号をつけてくれました。全国をさがしてもおな
じ雅号はないだろうと今でもおじは自慢していま
す。
(電話業・四十一歳)

各地柳談

★

▼「雅号ぶっちゃけばなし」酔々さんが一二
〇になつていますが、一三が欠で、ズラさ
れたのかも知れませんが、私のみるところで
は七二も欠になつていきますので(私の見落と
しも知れませんが)——ご注意感謝。

用紙難の折柄、立派な二月号手にして本当
にご苦労様と感謝しています。

川柳塔社は女性が強いです「川柳沈没」は
ないでしよう。

▼「一口論説」あまりふざけるとマンガにな
つてしまふし、かといって格調が高すぎると
川柳の意味がなくなつてしまふ。またあまり
前衛化しすぎると詩とも何ともわけの分らぬ
変テコなものになつてしまふし、川柳とはイ
ヤハヤまったくむずかしいものですね。

▼「洗剤異変」には小店なども実にこまりま
した。買い溜め攻勢にうちで使う洗剤まで出
す始末でした。
(倉敷市・小野克枝)

あほらしいことまで点検させられる 古 方
点検は今日の機械のよく光り 好 一
点検のミス、ベテランに指摘され 儀 一
晴着の娘裾をまくった太鼓橋 三 四
昔ここに橋があつたと云う石碑 美 幸
薬より嬉しい友の笑顔来る 綾 女
下駄はいて育つて靴に泣かされる 弘 生
再起する男スランプリ口にせず 俊 夫
スランプリは今日も頬杖ついたまま 摩 天郎

・ 募 集 ・

五月号発表 (3月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵 選
水煙抄 (10句) 川村好郎 選
課題吟 (各題5句以内)
「理容」 岩田美代 選
「おもちゃ」 山本立児 選
「鳥」 岡崎祥月 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

六月号発表 (4月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵 選
水煙抄 (10句) 川村好郎 選
課題吟 (各題5句以内)
「父の日」 島田雄峰 選
「貿易」 大鶴喜由 選
「鮎」 国弘半休門 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

7月7日は句集刊行と川柳大会

定価 二百五十円 (送料十六円)

半年分 千五百五十円 (送料共)
一年分 三千円 (送料共)

昭和四十九年二月二十五日印刷
昭和四十九年三月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地
編集人 中島蓬太郎
印刷所 太陽印刷株式会社
郵便番号 542

発行所 川柳塔社
大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地
電話大阪・二七一三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

本社三月句会

日時 三月八日 (金) 午後六時
会場 以和貴荘 (いわきそう)
阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275 番

柳話 西尾 栞
(今月の出題・板尾房人)

兼題 「限界」 阿部柳太 選
「スクープ」 金井文秋 選
「掴む」 西田柳宏子 選
「洋酒」 大坂形水 選

席題 三題 当日発表
会費 二百円 各題三句以内厳守

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20

川柳塔社

4月の兼題 「球名目」 「まほろし高姿勢」

何を選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券を
お贈りするのにも心に
くい贈物かと存じます

一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

 高島屋
大阪・なんば 日本橋 条
東京・四 京 都

・ペンペン草・

★本号から岡田甫先生ご指導の古川柳研究グループによる「俳風柳多留二十五篇研究」が新連載になる。ともに勉強してまいりましょう。

★三月号はいつも女性同人の特集をしてきたが、今年には自選五句を提出していただいた。句を拝見しながらおもったことだが、皆さんのなかにはもつとよい句があったはずである。やはり自選というものはむずかしいものである。が、特集に

疲労回復・肩こり・神経痛に

アリナミンA

☆25ミリ錠・ほかに5ミリ錠

☆食後すぐのものが効果的です

☆くわしくは医師や薬局・薬店で



28

寄せられたご熱意には感謝申しあげる。同人六名に一名が女流作家で、そのうちの五名に一人が参加してくださったのだからありがたかった。

★サテ、さしもの紙キシンもやや緩和されたものの、ナメテかかるとまたカミの怒りがあるだろう。ポルノ派の週刊誌も相当にすげえを消していったようであるし、まだまだ印刷用紙は薬親できない。

★鹿山季之責任編集で売りこんだ「噂」は、年間二千五百万円の赤字だったそう。それが最近は一か月千五百万円が赤字だと聞いた。これでは、いくら（活

▼流行は雛人形にもあるらしく、今年には丸くパツチリから面長ひとかわ目と変ってきてるらしいです。某新聞に掲載してました。

▼不景気の方が高値の品が売れるらしいのです。せめてもの心の慰めなのでしようか。それを川柳で慰められておられる方も多いようですネ。

字にならなかつたお話の雑誌）でもオハナシにならないほど苦しいだろう。出版という仕事はむずかしい商売だとしてくづく考えさせられる。まして同人雑誌となれば何をか云わんやである。

★柳誌の店頭販売はすくないが、本誌の場合、返品されてきた雑誌をまず包みを解いて中を調べて。手垢もついていない、委託したままの姿が多いとガツカリする。店頭でだれも手にしてくれなかつた証拠だ。ところがよくれたのが多いとホッとするわけである。

★本屋さんで週刊誌などを返品する場合、乱暴に荷造りする店、またはわが子を旅させる暗れ着のように包みも丁寧な店もあるということだ。売れ残った雑誌にも愛着に似たものを感じる店主のほとんどは、かつては同人雑誌に関係していた人に多いとのことである。

★いままでは編集室にある残本をそこかまわず置いていたが、それが格好のイスがわりになるので、このごろでは来客が腰をおろせない場所へ移動させた。講

談の水戸黄門が米俵に腰をおろし、農民に謝罪するところがある。アレに通じるものがほくにもあるのだ。

★近所に住む小出智子さんと河野君子さんがときどき多くの本を書棚から持って帰る、どんなポロポロの本でも大切にいつまでももてるのがうれしい。また二年越しにまたがる場合は、かならず年末に一応返えしにきて、あらためて持って帰られる。

★秋田實先生にはよく雑誌をいただくが、どれも新本のように美しい。例の発禁になった『面白半分』野坂昭如氏の、「四畳半襖の下

ヤングのための
ガジュアルウェア

Kurabo fabrics

クラブウ
ガジュアルウェア

倉敷紡績株式会社

張」も先生からいただいたものである。東野大八先生にもネタ本をいただいたが相当古い本なのにきれいに保存されたものばかりだった。

★山田季賀氏に、新幹線新大阪駅地下にある倉庫ふうの物置き場を見せてもらったことがある。おびただしい週刊誌や新聞紙の山にはおったまげたものである。ところが最近の地下鉄などの崩入れには新聞紙がすくなくたって帰って売れるわけでもないだろうが、紙を大切にするのはいいことだ。

(不田一三夫)

(送料 十六円)